



# 2020年度 IRコンソーシアム 学生調査結果報告

2022年3月  
藤女子大学IR専門部会

文部科学省によって、学生の学修成果の可視化と把握が求められ、第3サイクルを迎えた認証評価では「内部質保証の実質化」が求められています。その要の一つとして、学内データを収集・分析し、改善施策を立案、施策の実行・検証を行うIR（Institutional Research）機能があります。本学でも、2017年5月IR専門部会を発足させ、学生の学修・満足度等のデータを収集、解析、公表をしてきました。2018年からは国公立62大学が加盟する大学IRコンソーシアムの会員となり、学生に対し、学修行動や学習時間、能力に関する自己評価、満足度を中心としたコンソーシアム共通の調査項目で学生調査を実施して参りました。

この度、大学IRコンソーシアム入会3年目の2020年度の調査結果をまとめ、本学の2018・2019年度との経年比較を行いながら、2020年度のコロナ禍における本学の現状につきましても把握し分析したので報告いたします。各学科、事務局毎にこの学生調査データをご参考としていただき、見直し・改善をいただく機会をいただけたら、大学の大きなIR、およびPDCAにつながっていくと期待されます。このような学生調査を今後も継続することで一人ひとりの学生の成長を把握することができ、それに応じた支援のあり方を検討するための材料となります。また学内の教学データとリンクさせることで、学修成果に関するアセスメントにも発展できることから、今後も継続して取り組んでいきたいと考えております。

藤女子大学IR専門部会

## I. 学生アンケート回答率内訳

## II. 学生アンケートの両学部の間年比較結果

1. 学修に関する経験
2. 時間の使い方
3. 教育への満足度
4. 設備・制度への満足度
5. 授業での経験
6. 能力の変化

# 学生アンケート回答率内訳（2020年度）

## 2020年度 IRコンソーシアム 学生アンケート回答者

学年	英語文化学科			日本語・日本文学科			文化総合学科			文学部計		
	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率
1年	76	94	80.9%	105	119	88.2%	77	92	83.7%	258	305	84.6%
2年	70	100	70.0%	82	101	81.2%	87	99	87.9%	239	300	79.7%
3年	59	92	64.1%	63	82	76.8%	74	101	73.3%	196	275	71.3%
4年	76	110	69.1%	64	99	64.6%	58	101	57.4%	198	310	63.9%
学科計	281	396	71.0%	314	401	78.3%	296	393	75.3%	891	1,190	74.9%

学年	人間生活学科			食物栄養学科			保育／子ども教育学科			人間生活学部計		
	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率
1年	51	72	70.8%	62	76	81.6%	70	85	82.4%	183	233	78.5%
2年	39	58	67.2%	66	80	82.5%	50	65	76.9%	155	203	76.4%
3年	36	54	66.7%	62	85	72.9%	61	76	80.3%	159	215	74.0%
4年	35	55	63.6%	73	95	76.8%	63	83	75.9%	171	233	73.4%
学科計	161	239	67.4%	263	336	78.3%	244	309	79.0%	668	884	75.6%

※学生アンケート実施期間 2020年12月7日～12月21日

文学部 : 2020年12月1日現在在学中の学生

人間生活学部 : 2020年12月1日現在在学中の学生

(休学者及び海外及び国内協定校留学中の学生を除く。)

大 学 計			
学年	回答者数	対象者数	回答率
1年	441	538	82.0%
2年	394	503	78.3%
3年	355	490	72.4%
4年	369	543	68.0%
全学年	1,559	2,074	75.2%

# 学生アンケート回答率内訳（2019年度）

## 2019年度 IRコンソーシアム 学生アンケート回答者

学年	英語文化学科			日本語・日本文学科			文化総合学科			文学部計		
	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率
1年	89	96	92.7%	91	99	91.9%	88	97	90.7%	268	292	91.8%
2年	60	83	72.3%	61	85	71.8%	71	101	70.3%	192	269	71.4%
3年	86	100	86.0%	74	93	79.6%	62	87	71.3%	222	280	79.3%
4年	69	87	79.3%	59	104	56.7%	59	92	64.1%	187	283	66.1%
学科計	304	366	83.1%	286	381	74.3%	280	377	74.3%	869	1,124	77.3%

学年	人間生活学科			食物栄養学科			保育／子ども教育学科			人間生活学部計		
	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率
1年	39	59	66.1%	76	81	93.8%	61	65	93.8%	176	205	85.9%
2年	47	54	87.0%	82	84	97.6%	73	75	97.3%	202	213	94.8%
3年	42	54	77.8%	88	98	89.8%	76	83	91.6%	206	235	87.7%
4年	50	63	79.4%	75	79	94.9%	79	89	88.8%	204	231	88.3%
学科計	178	230	77.4%	321	342	93.9%	289	312	92.6%	788	884	89.1%

※学生アンケート実施期間 2019年9月～11月

文学部 : 2019年9月25日現在在学中の学生

人間生活学部 : 2019年10月30日現在在学中の学生

(休学者及び海外及び国内協定校留学中の学生を除く。)

大 学 計			
学年	回答者数	対象者数	回答率
1年	444	497	89.3%
2年	394	482	81.7%
3年	428	515	83.1%
4年	391	514	76.1%
全学年	1,657	2,008	82.5%

# 学生アンケート回答率内訳（2018年度）

## 2018年度 IRコンソーシアム 学生アンケート回答者

学年	英語文化学科			日本語・日本文学科			文化総合学科			文学部計		
	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率
1年	85	93	91.4%	80	83	96.4%	67	107	62.6%	232	283	82.0%
2年	69	87	79.3%	85	102	83.3%	47	88	53.4%	201	277	72.6%
3年	74	80	92.5%	69	98	70.4%	55	91	60.4%	198	269	73.6%
4年	54	83	65.1%	36	85	42.4%	41	94	43.6%	131	262	50.0%
学科計	282	343	82.2%	270	368	73.4%	210	380	55.3%	762	1,091	69.8%

学年	人間生活学科			食物栄養学科			保育学科			人間生活学部計		
	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率	回答者数	対象者数	回答率
1年	49	56	87.5%	80	88	90.9%	66	75	88.0%	195	219	89.0%
2年	50	55	90.9%	84	96	87.5%	78	84	92.9%	212	235	90.2%
3年	50	62	80.6%	77	81	95.1%	74	87	85.1%	201	230	87.4%
4年	51	84	60.7%	76	84	90.5%	62	78	79.5%	189	246	76.8%
学科計	200	257	77.8%	317	349	90.8%	280	324	86.4%	797	930	85.7%

※学生アンケート実施期間 2018年11月～12月

2018年10月31日現在在学中の学生（休学者及び海外及び国内協定校留学中の学生を除く。）

大学計			
学年	回答者数	対象者数	回答率
1年	427	502	85.1%
2年	413	512	80.7%
3年	399	499	80.0%
4年	320	508	63.0%
全学年	1,559	2,021	77.1%

# 1. 学修に関する経験

**Q. 大学の授業や授業以外の学習に関して、あなたはどのくらい経験しましたか。**

1-1. 授業課題のために図書館の資料を利用した

1-2. 授業課題のために Web上の情報を利用した

1-3. インターネットを使って授業課題を受けたり、提出したりした

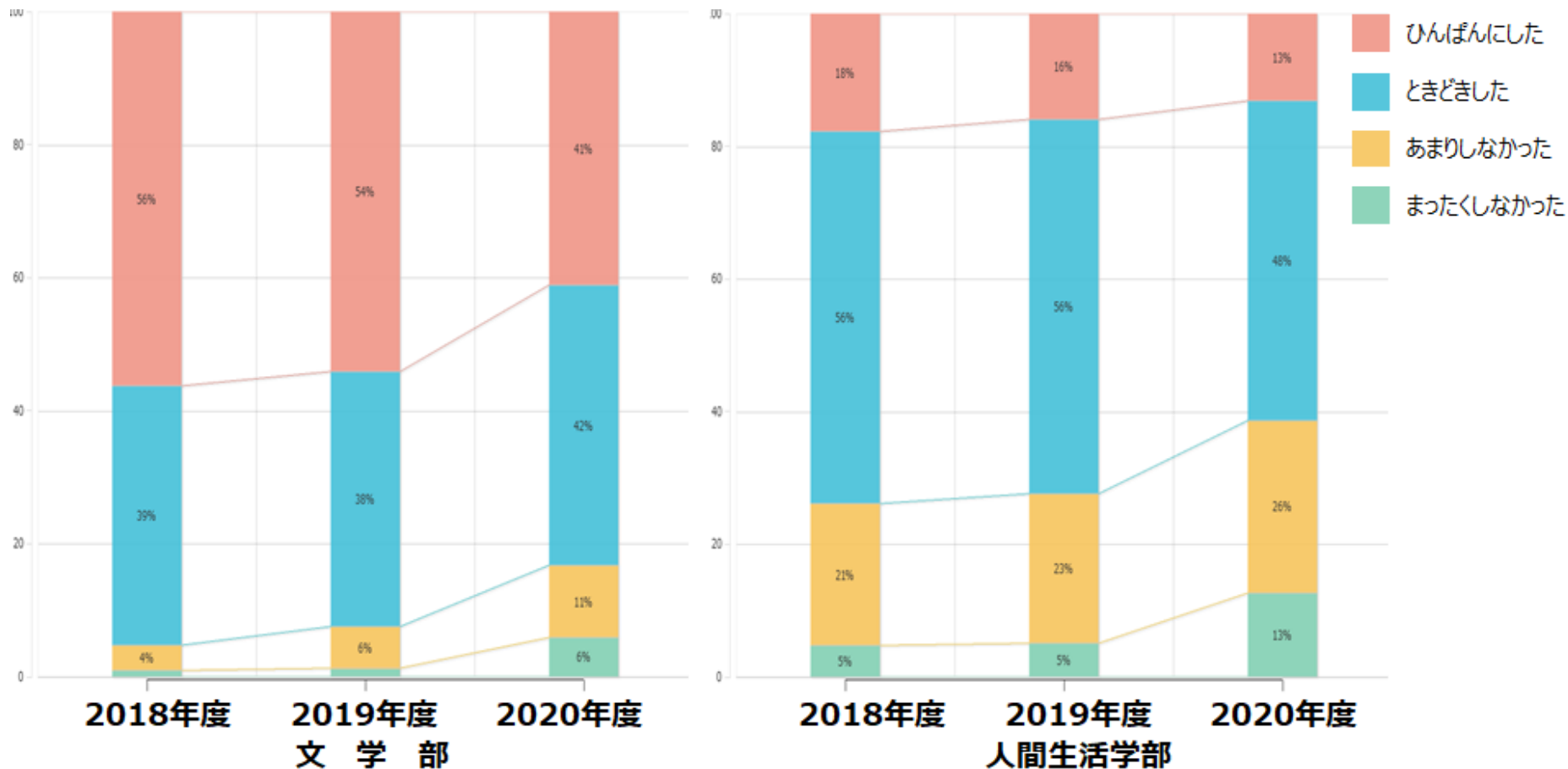
1-4. 授業時間外に、他の学生と一緒に勉強したり、授業内容を話したりした

1-5. 教職員に学習に関する相談をしたり、学内の学習支援室を利用したりした

1-6. 教員に親近感を感じた

# 1-1. 授業課題のために図書館の資料を利用した

[Q5-A]



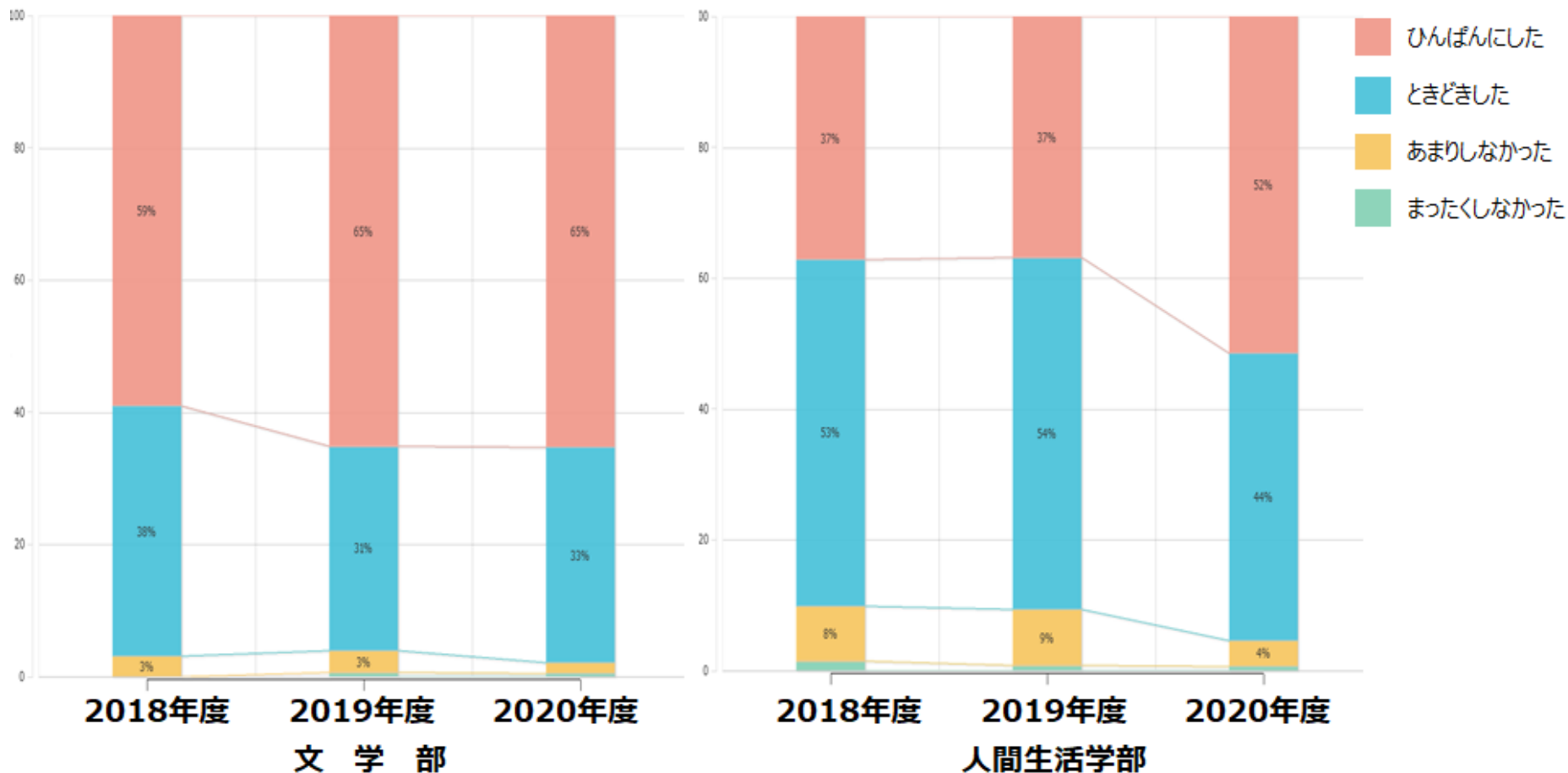
## 【コメント】

コロナ禍で非対面授業が多くなり、通学する学生が減った影響により、特に文学部では図書館利用率が2019年度に比べて低くなっている。人間生活学部は実験実習などで通学する機会が確保されていたこともあり、文学部と比較して減少率は少なかった。



## 1-2. 授業課題のために Web 上の情報を利用した

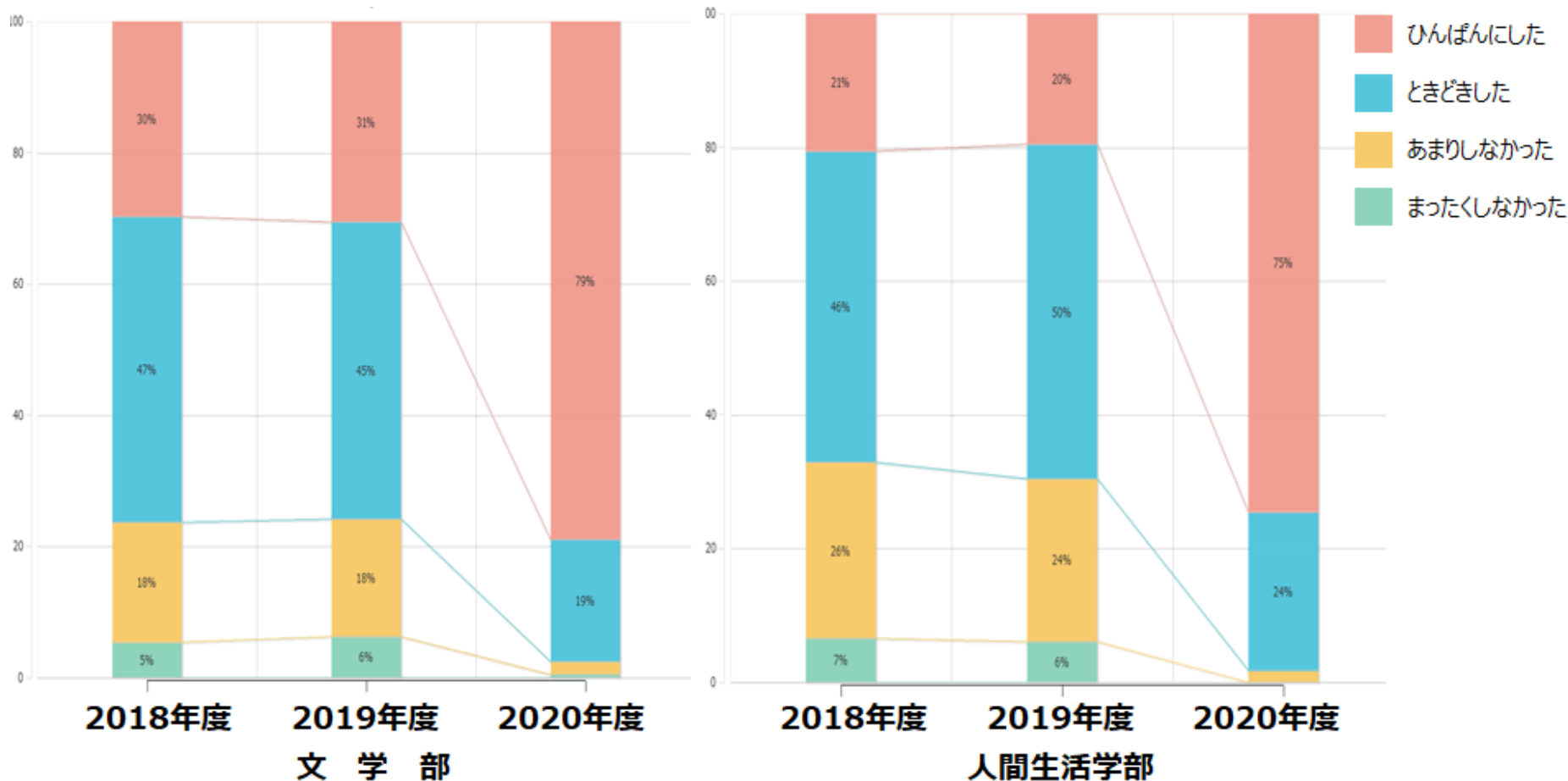
[Q5-B]



非対面授業という状況下で、Web上の情報利用が多くなることが見込まれたが、結果としては、「ひんぱんにした」「ときどきした」の割合が、文学部では横ばい、人間生活学部では微増にとどまった。既にWebから情報を取得することがスタンダードとなっており、非対面授業の影響が軽微だったことが伺える。

# 1-3. インターネットを使って授業課題を受けたり、提出したりした

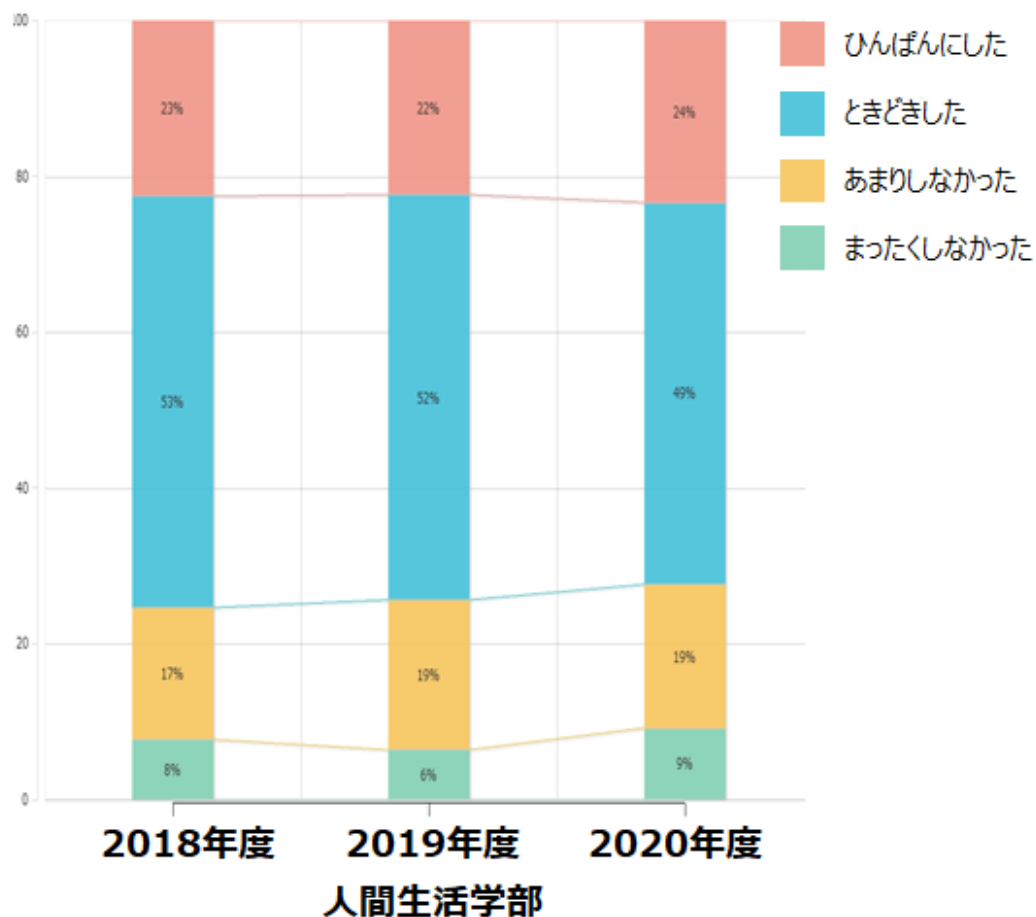
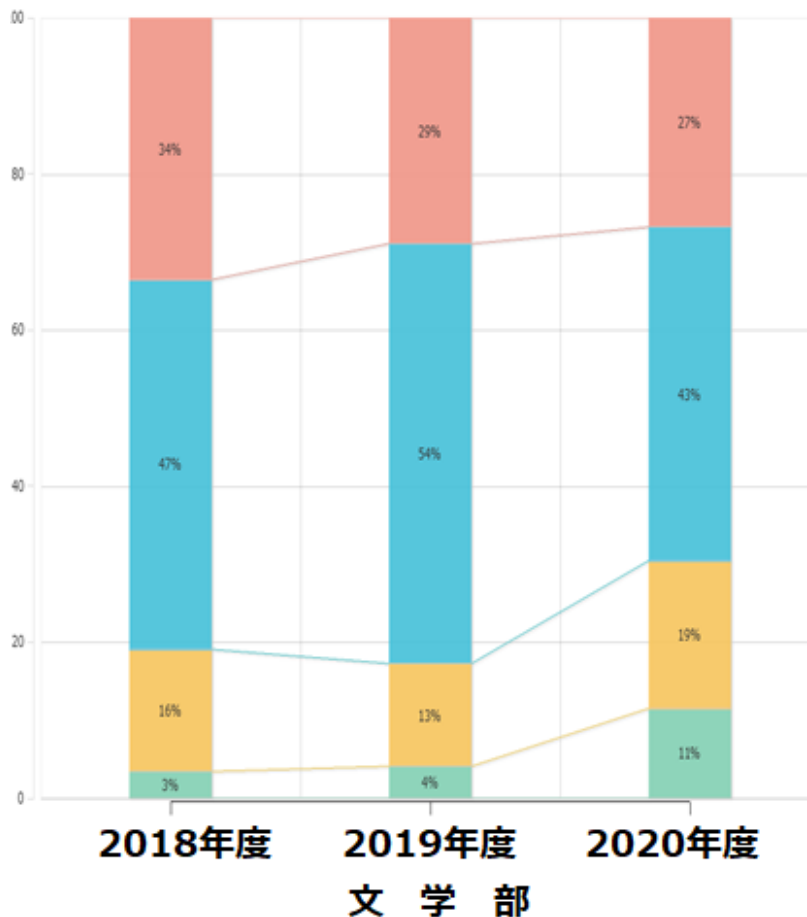
[Q5-C]



## 【コメント】

LMSやZoomの活用による非対面授業がコロナ禍によって実施され、その結果が両学部ともに顕著に表れている。

# 1-4. 授業時間外に、他の学生と一緒に勉強したり、授業内容を話したりした

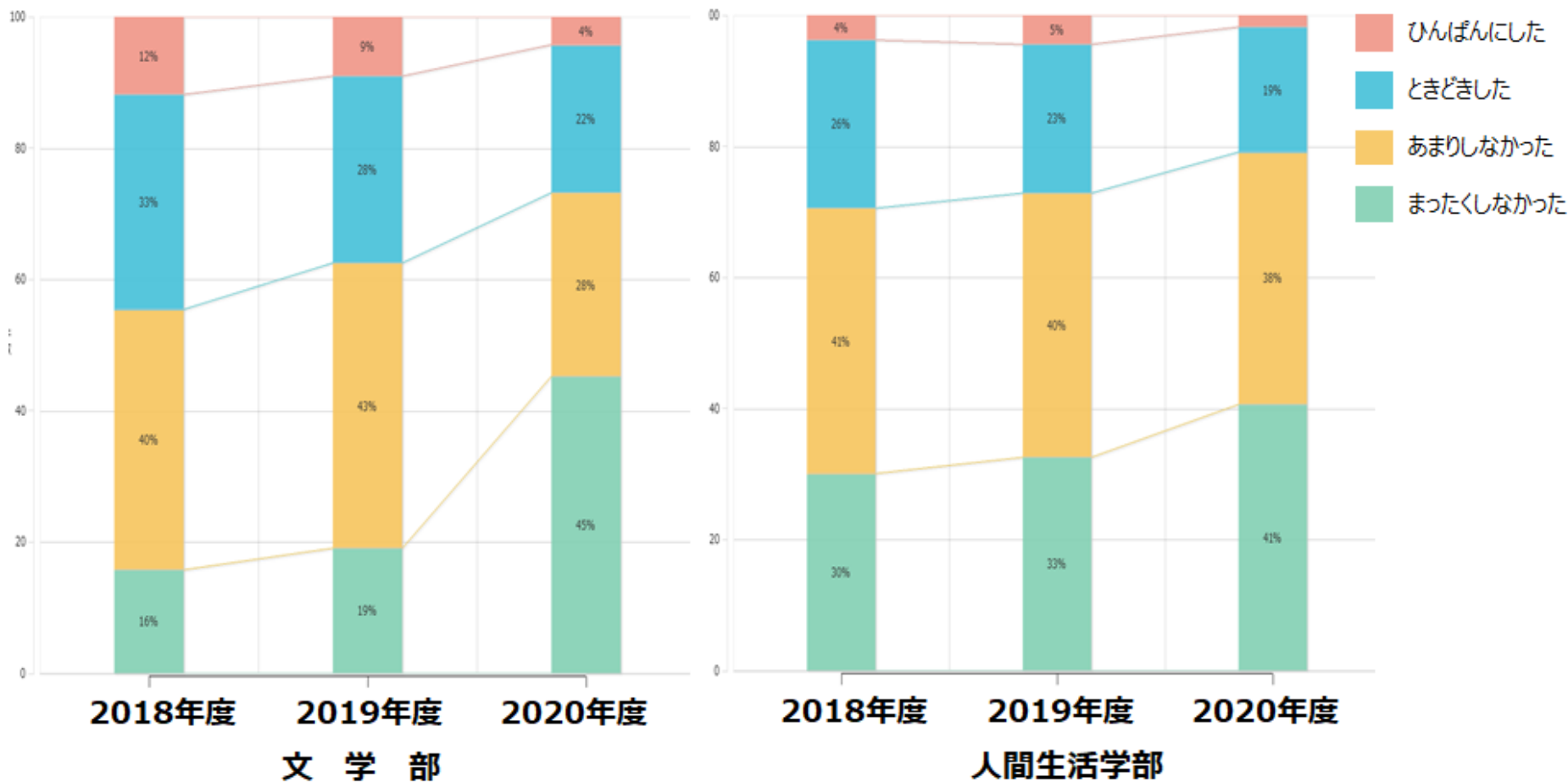


## 【コメント】

非対面授業により通学機会が減少したため大きな影響があるかと思われたが、結果として「ひんぱんにした」「ときどきした」の割合は文学部で減少したものの、人間生活学部ではほぼ横ばいであった。人間生活学部では非対面授業という手探りの状況下であり、教員との密なやり取りが難しい環境下であったことが、結果として学生間の情報交流を活発化させた可能性がみられる。

# 1-5. 教職員に学習に関する相談をしたり、学内の学習支援室を利用したりした

[Q5-K]

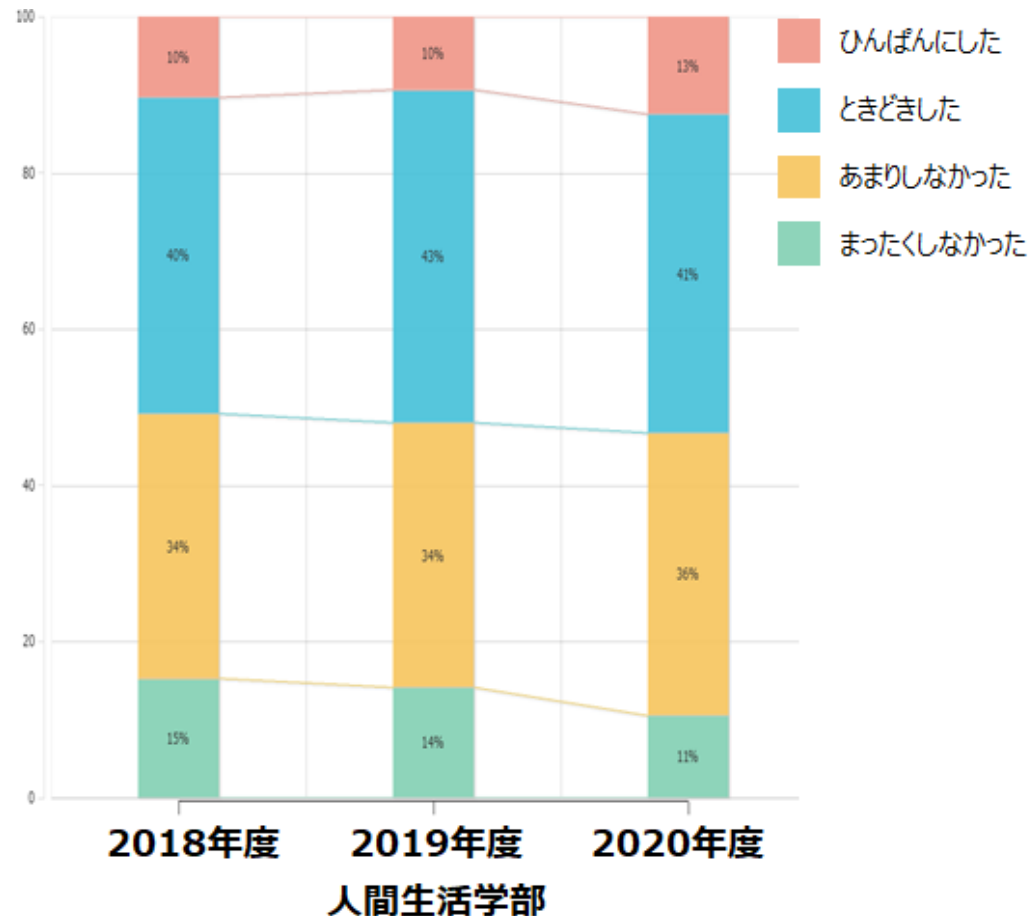
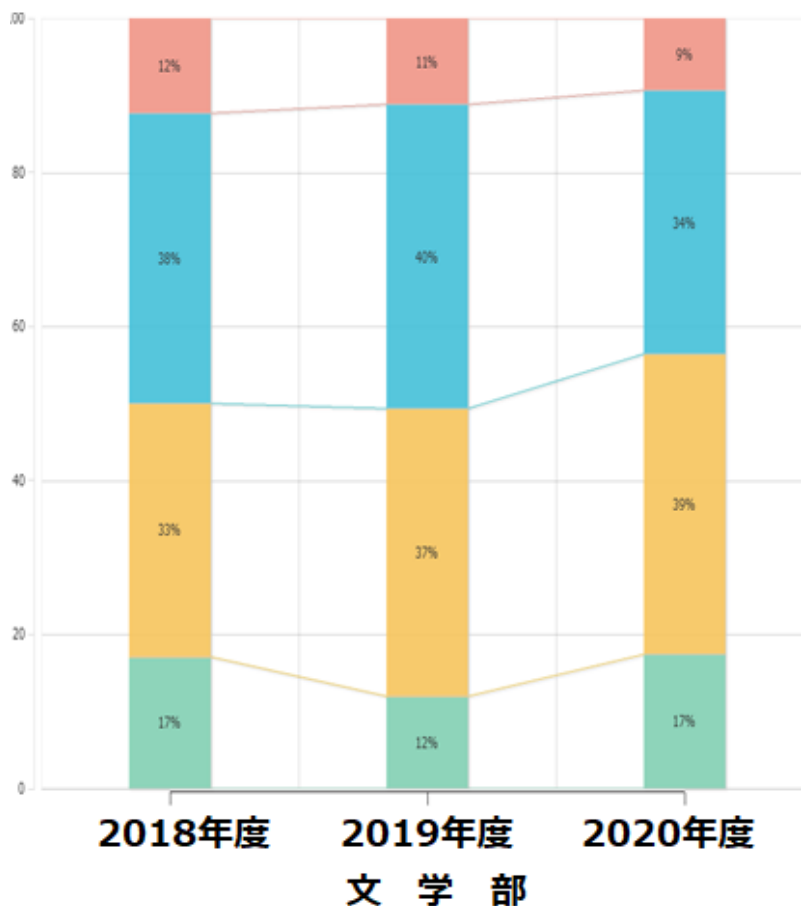


## 【コメント】

非対面授業により学生と教員のコミュニケーションが限定されていたことから、両学部とも「ひんぱんにした」「ときどきした」の割合が2019年度と比較して減少した。非対面授業であっても学生とのアクセスを密にする手段の検討が必要と思われる。

# 1-6. 教員に親近感を感じた

[Q5-N]



## 【コメント】

「ひんぱんにした」「ときどきした」の割合は2019年度と比較して、文学部で減少、人間生活学部で横ばいであった。非対面授業が中心となったことは両学部変わらないが、このような差が出たことについて、非対面授業時の各教員の対応について精査する必要がある。

コロナ禍における非対面授業の実施による影響が、設問 1-1、1-3、1-5 に大きく出ている。しかし影響が大きいことが想定された 1-4 にはそれほどの変動はなく、今の世代が SNS などのデジタル世界での繋がりがコミュニケーションの大きなウェイトを占めていることが示されている。

むしろ問題となったのは 1-5、1-6 に示される通り、非対面授業における教員と学生のコミュニケーションであり、非対面授業の有効な手法の共有などを FD 活動を通じてしっかりと行うことや、通学しないことで表面化しづらい学生の問題にかかわるケアなどについて、大学全体で問題点を洗い出し、対策を講じる必要がある。

## 2. 時間の使い方

**Q. あなたは次の活動に1週間あたりどのくらいの時間を費やしましたか。**

**2-1. 授業や実験に出る**

**2-2. 授業時間外に、授業課題や準備学習、復習をする**

**2-3. 授業時間外に、授業に関連しない勉強をする**

**2-4. オフィスアワーなど、授業時間外に教員と面談する**

**2-5. 部活動や同好会に参加する**

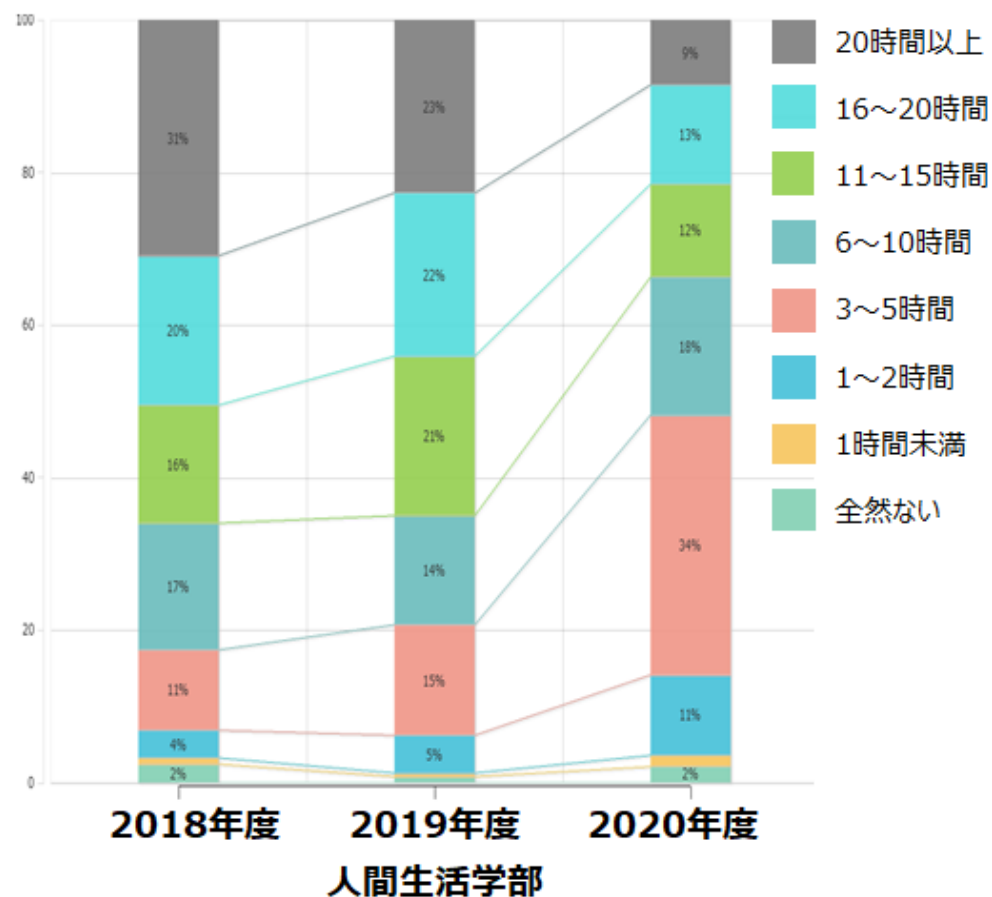
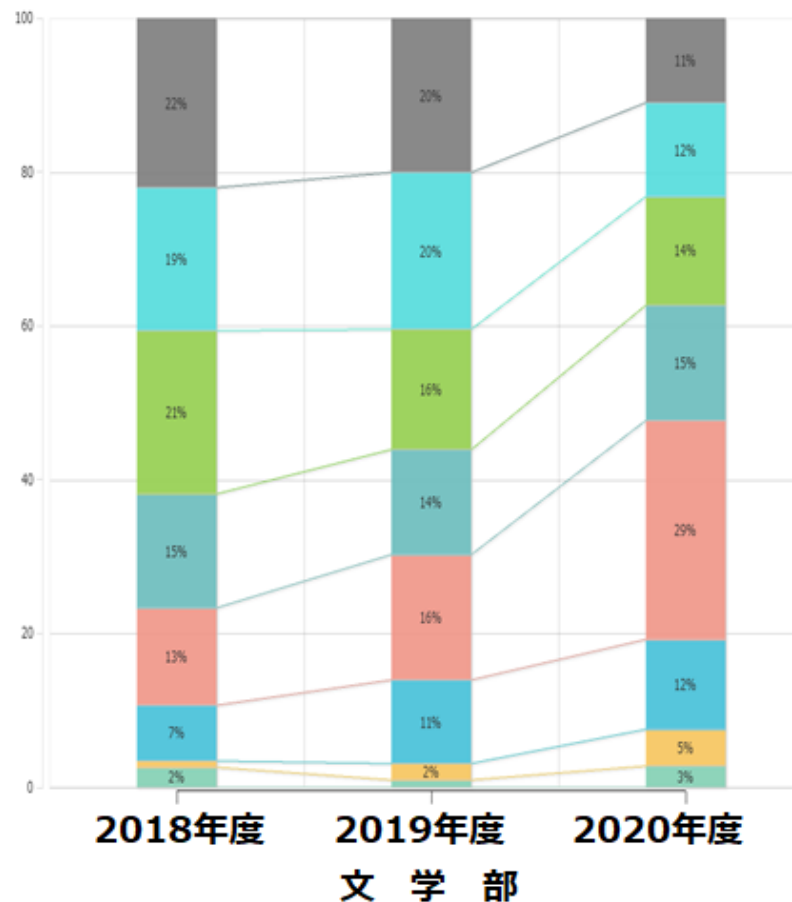
**2-6. 大学外でアルバイトや仕事をする**

**2-7. 読書をする（マンガ・雑誌を除く）**

**2-8. 個人的な趣味活動をする（テレビやゲーム、映画鑑賞など）**

## 2-1. 授業や実験に出る

[Q6-A]



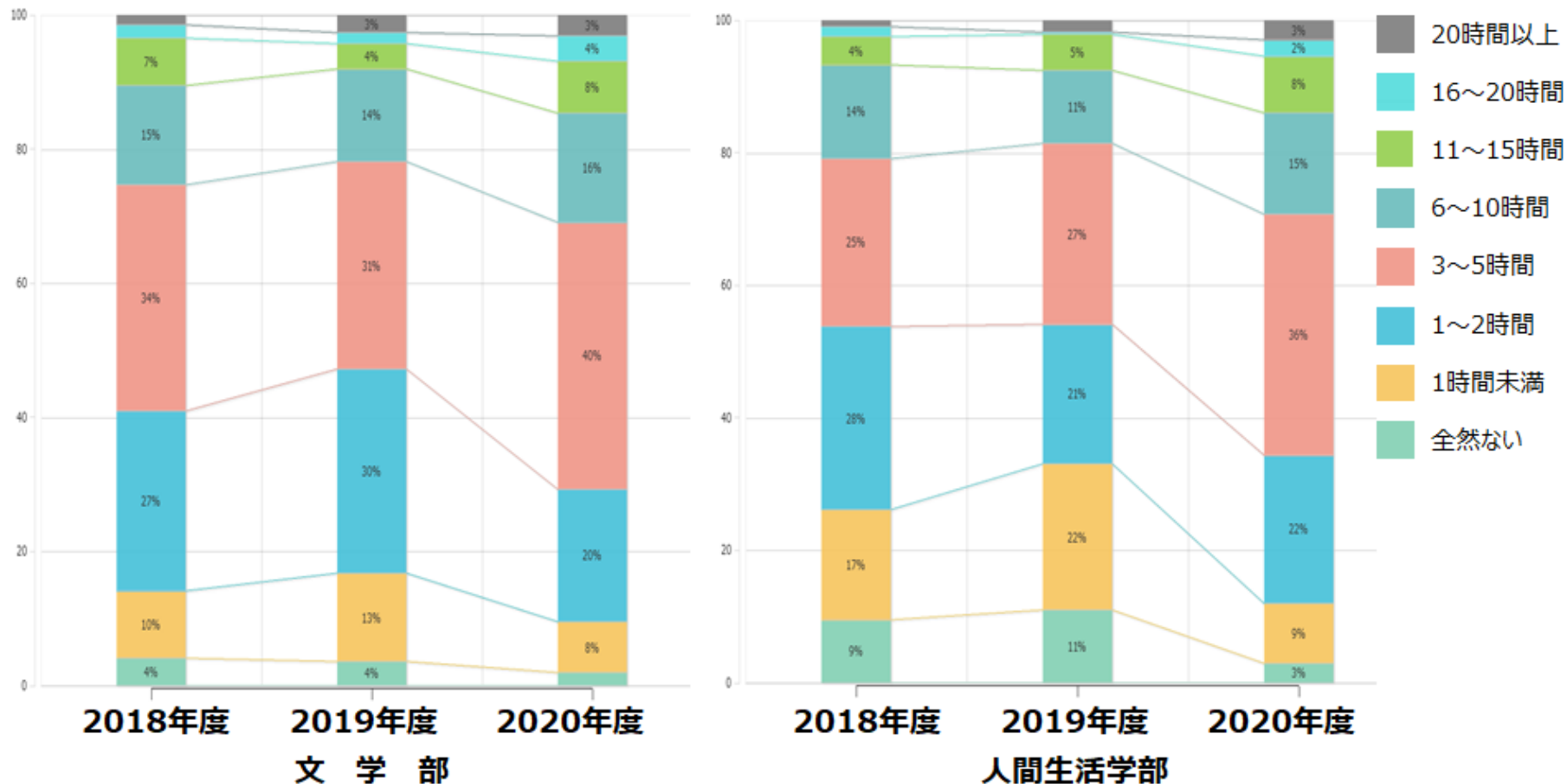
### 【コメント】

授業や実験への参加時間は昨年の時点で減少傾向ではあったが、今年度に入り加速している。特に「3～5時間」の割合が増え、「20時間以上」の割合が減っており、昨年ほとんどいなかった「全然ない」と回答した学生が増加している。



## 2-2. 授業時間外に、授業課題や準備学習、復習をする

[Q6-B]

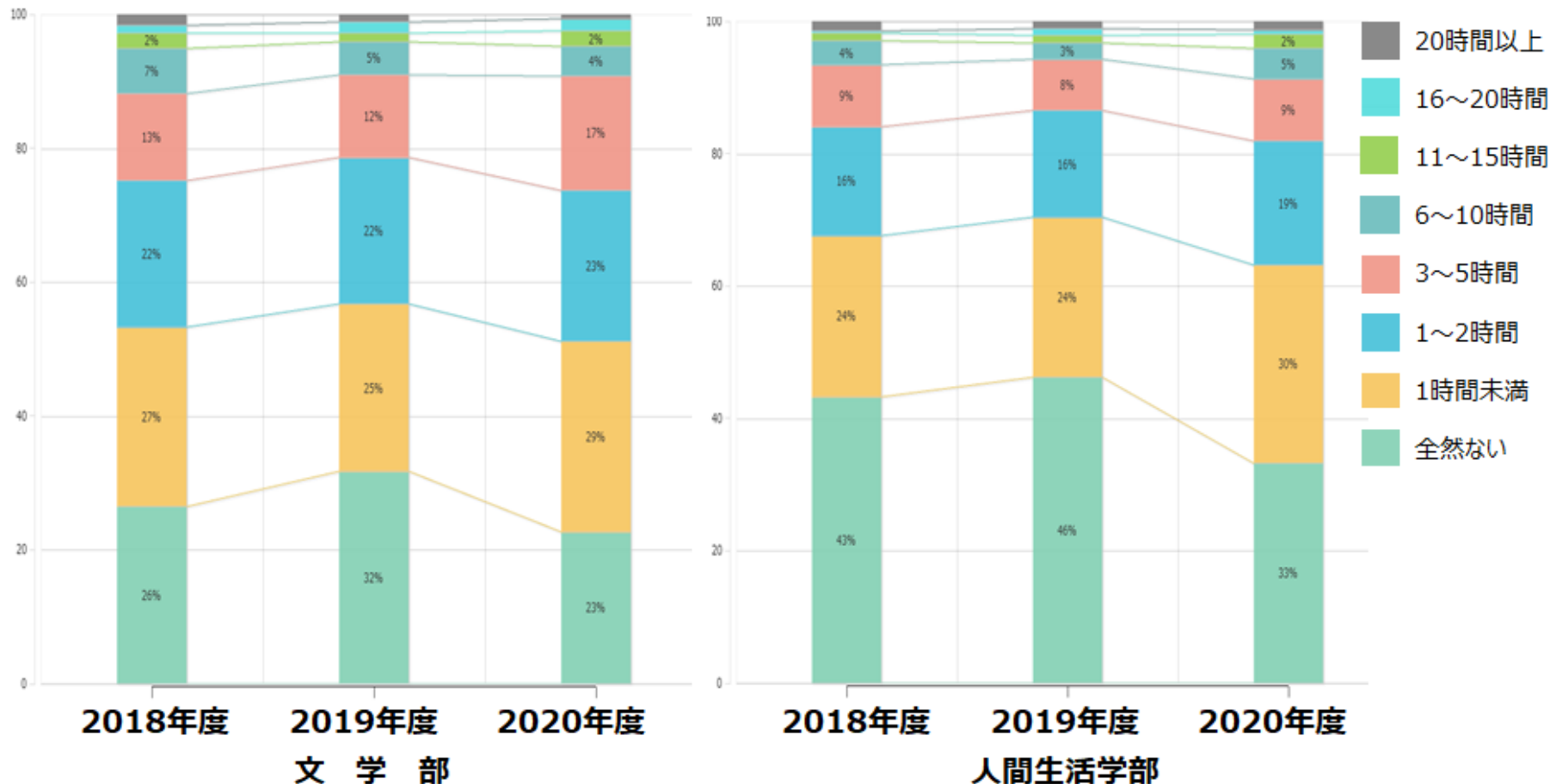


### 【コメント】

文学部では昨年5割程度に増加した「2時間未満」が3割程度に減少し、「3～5時間」が増加している。人間生活学部も割合は若干異なるものの同じ傾向となっている。いずれもオンライン授業による自宅学習時間増加の影響の可能性が考えられる。

## 2-3. 授業時間外に、授業に関連しない勉強をする

[Q6-C]

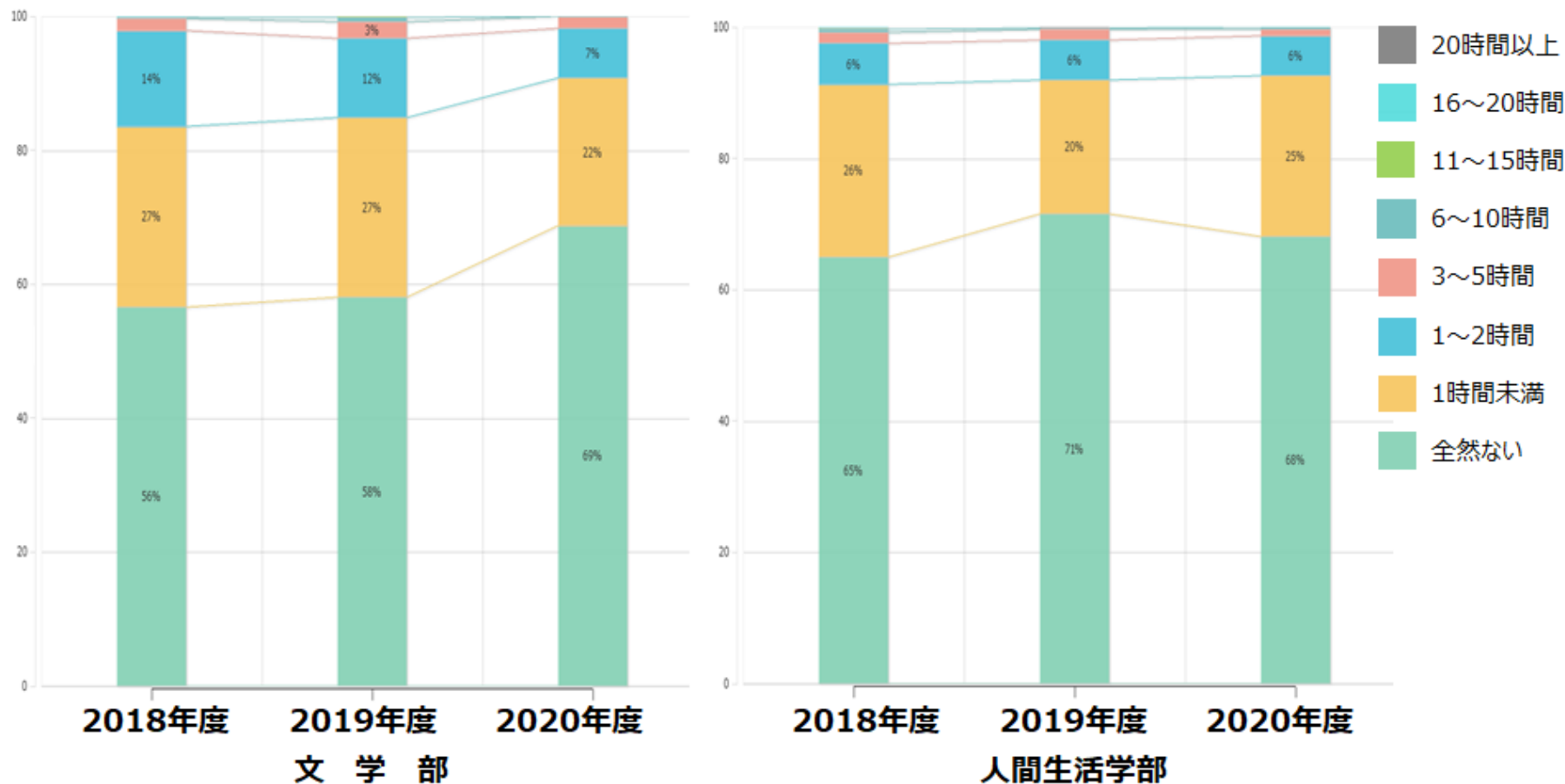


### 【コメント】

授業に関連しない勉強が「全然ない」学生の割合が両学部ともに減少し、1時間以上の割合がそれぞれ微増している。オンライン授業により登校時間が減少した分、授業に関連しない分野への興味・関心が増えた可能性が考えられる。

## 2-4. オフィスアワーなど、授業時間外に教員と面談する

[Q6-D]

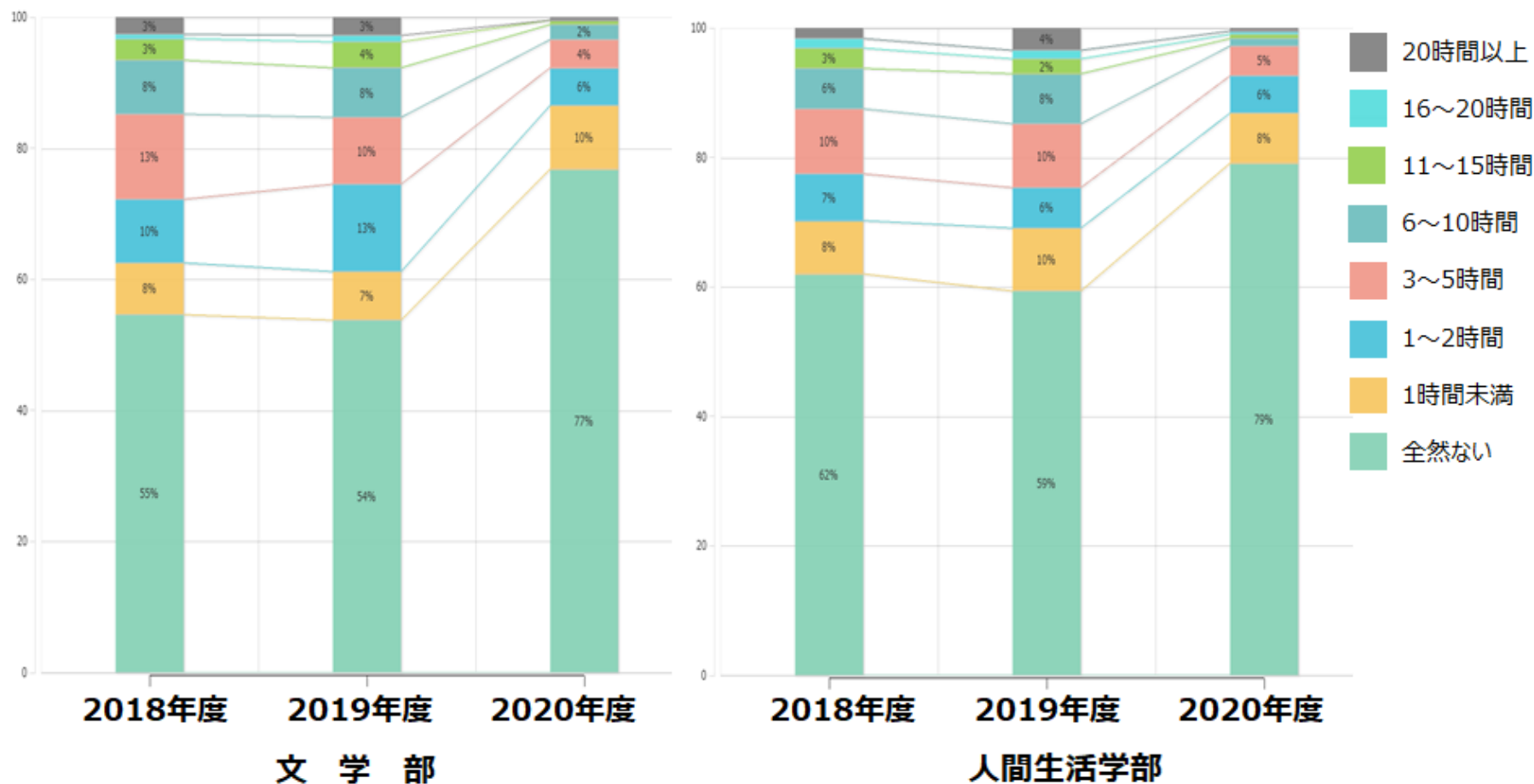


### 【コメント】

文学部は面談が「全然ない」学生が6割から7割まで増加し、「1時間未満」「1~2時間」の学生が減少していることから、今年度の文学部は教員との面談の減少が顕著に見られる。一方で、人間生活学部は「全然ない」学生が若干減少し、「1時間未満」の学生が増えている。実験や実習等で文学部よりも登校する機会が人間生活学部は多いからか、教員と面談する機会を持てたと推測することができる。

## 2-5. 部活動や同好会に参加する

[Q6-E]

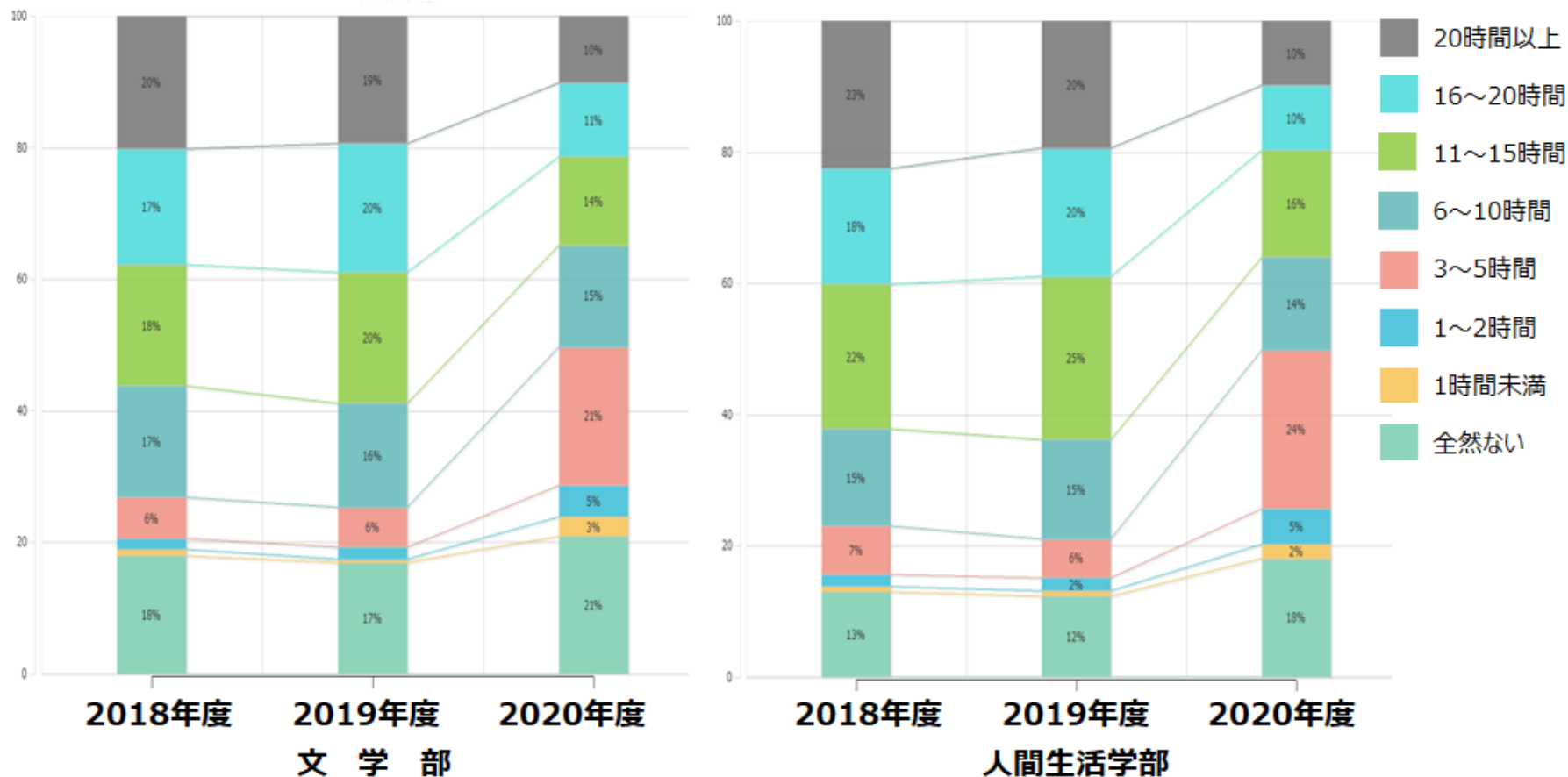


### 【コメント】

文学部は昨年5割程度が参加していたが2割強に減少、人間生活学部も4割程度の参加から2割程度へと減少している。人間生活学部は文学部と比較して部活動や同好会への参加の割合が昨年までも少なめで、実験・実習等授業による拘束時間や通学時間の影響が要因として考えられるが、今年度はコロナ禍によりその傾向がより顕著となっている。

## 2-6. 大学外でアルバイトや仕事をする

[Q6-F]

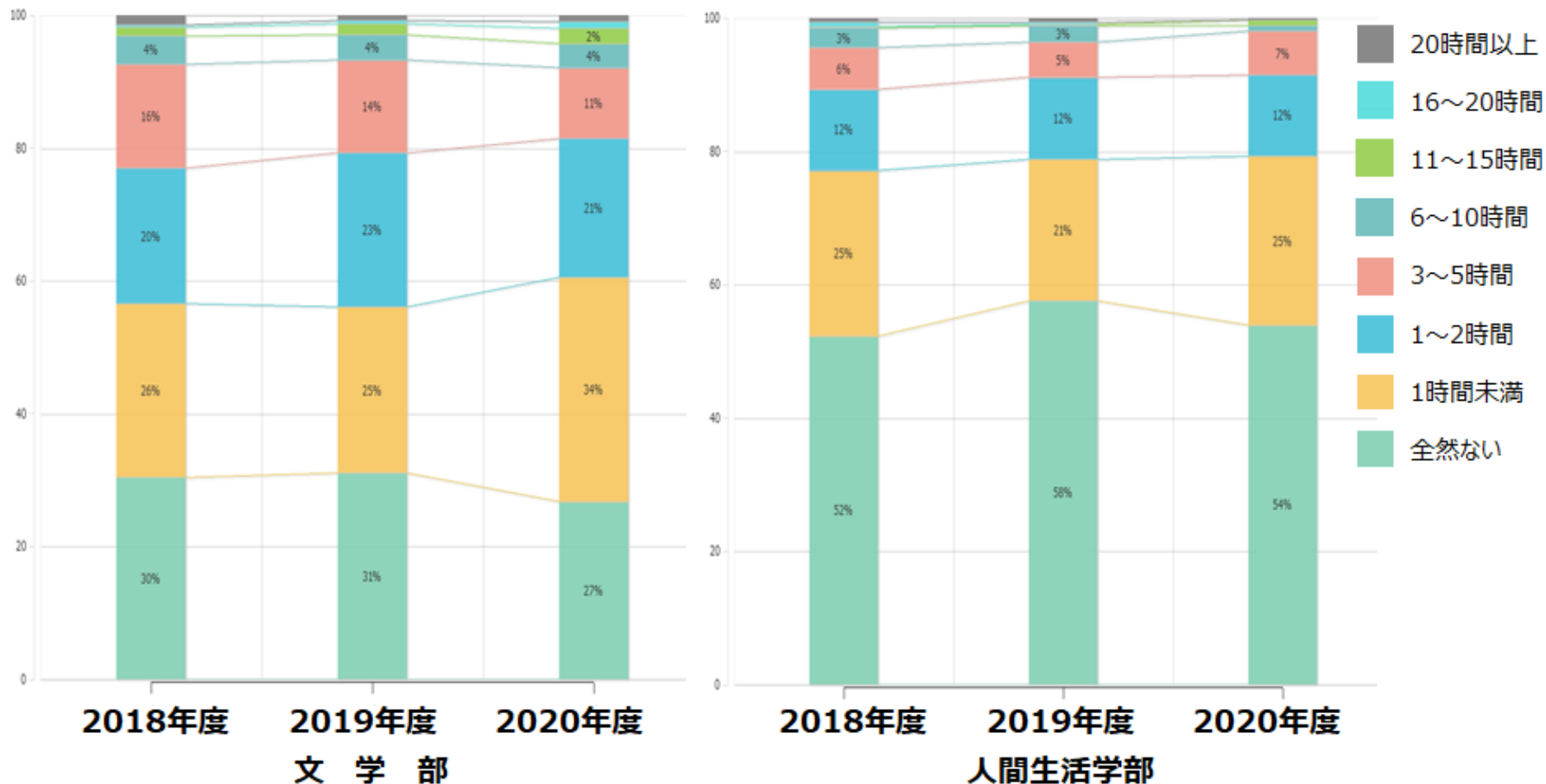


### 【コメント】

両学部共に昨年までは16時間以上アルバイト等に費やしていた学生が4割程度いたが、今年度は2割程度に減少し、一方で「3～5時間」や「全然ない」の割合が増加した。コロナ禍によりアルバイト等の勤務を減らされ、それによる生活の困窮もありうることから、アルバイト時間減少の良し悪しは一概には判断できない。

## 2-7. 読書をする（マンガ・雑誌を除く）

[Q6-G]

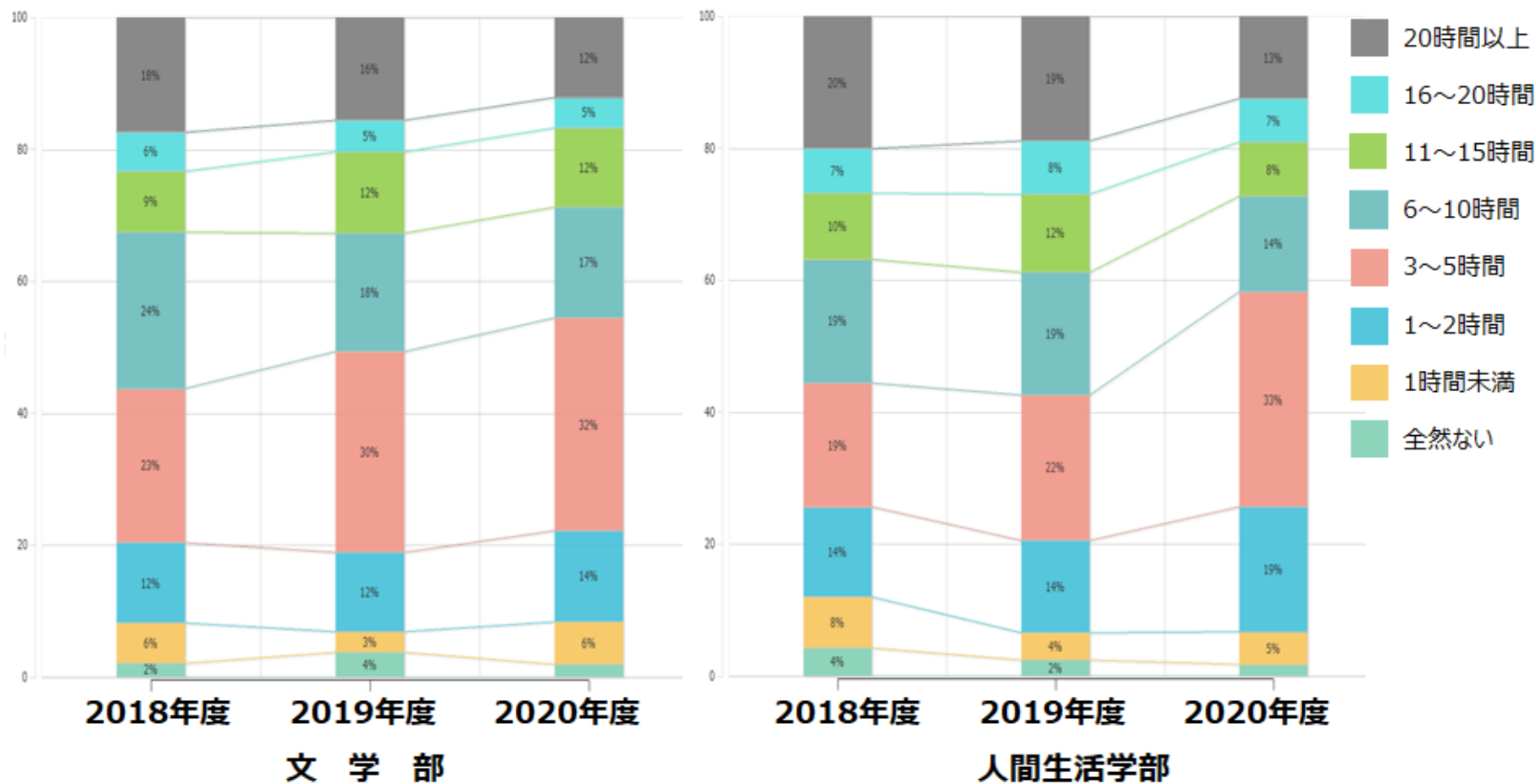


### 【コメント】

文学部は一昨年からも読書をする割合は多いが、今年度は「1時間未満」の割合が特に増えた。全体的には読書する傾向はあるが、読書にかかる時間は若干減少している。人間生活学部は読書をするのが「全然ない」学生が約半分という傾向は変わらない。

## 2-8. 個人的な趣味活動をする（テレビやゲーム、映画鑑賞など）

[Q6-H]



### 【コメント】

両学部ともに「3～5時間」の割合が増え、5時間未満が6割程度となっている。「全然ない」は昨年よりも減少しており、時間は多くないにしても、コロナ禍により個人的な趣味活動に時間を費やす学生は増えていると考えられる。

2020年度はコロナ禍によるオンライン授業等が学生の時間の使い方にも大きく影響した。授業への参加が減少し、自宅学習が増加したことは本学だけに限らないが、それによって教員との面談の機会や部活動なども減少している。時間の使い方として増加した個人的な趣味活動や読書等でバランスが保たれていると良いが、目に見えない部分で何らかの心理的ストレスが学生にかかっていることも予想される。

アルバイトも大学生にとっては必要な経験の一つではあり、一方で、平常時であればアルバイトに時間をかけ過ぎる傾向が見られれば注意喚起するところだが、アルバイトにより生計を立てている学生にとってはコロナ禍によるシフトの減少など、本人の意思と反したアルバイト時間の減少もあると考えられることから、2020年度のアンケート結果を昨年までと同じように比較することはできない。

「時間の使い方」一つとってもコロナ禍が多分に影響していることが見て取れ、数字に反映されない部分をいかに汲み取っていくかが、大学として今後必要になってくると考えられる。



## 3. 教育への満足度

Q. あなたは、本学の教育内容・環境にどれくらい満足していますか。

3-1. 専門教育あるいは所属学科の授業

3-2. 2年次または3年次を対象としたゼミ（演習）などの教育内容

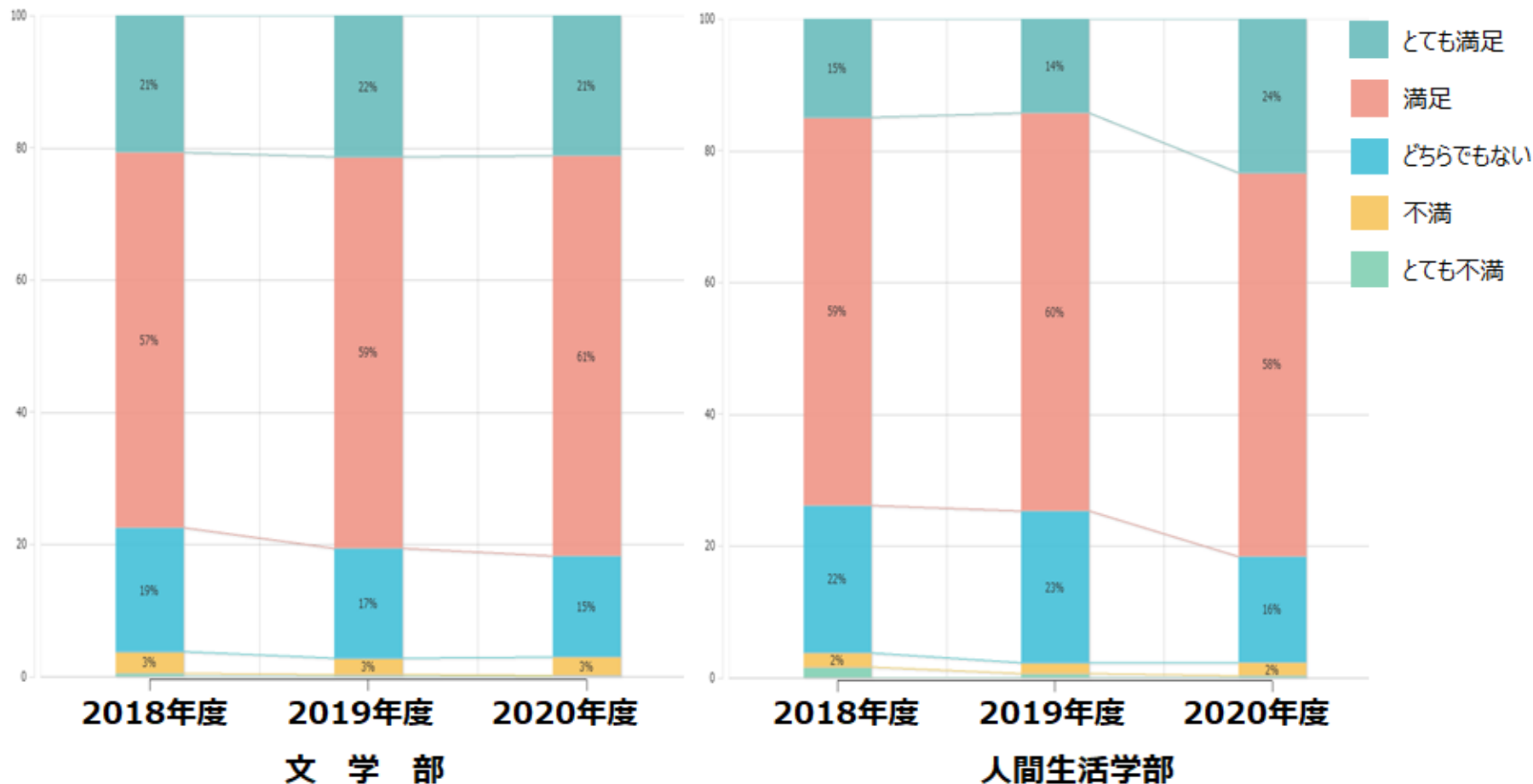
3-3. 授業の全体的な質

3-4. 教員と話をする機会

3-5. 多様な考え方を認め合う雰囲気

### 3-1. 専門教育あるいは所属学科の授業

[Q12-A]

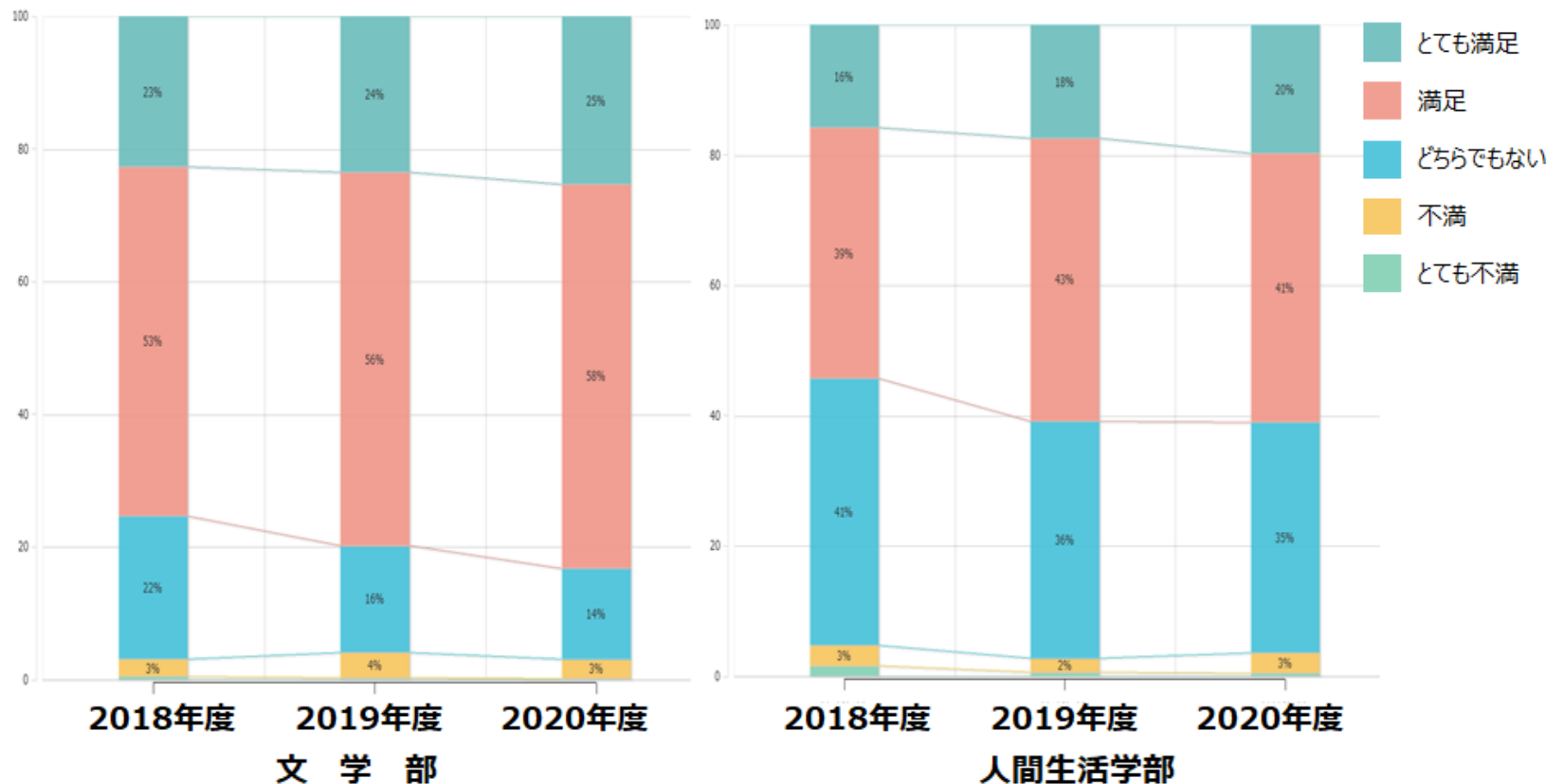


**【コメント】**

過去3年間の変化をみると、文学部では「とても満足」と「満足」を合わせた割合が年々増加している。人間生活学部では2018・2019年度で「とても満足」と「満足」を合わせた割合が変化していない一方で、2020年度では「とても満足」が前年度と比較して10ポイント増加しており、その結果合わせた割合も大きく増加している。

## 3-2. 2年次または3年次を対象としたゼミ（演習）などの教育内容

[Q12-B]

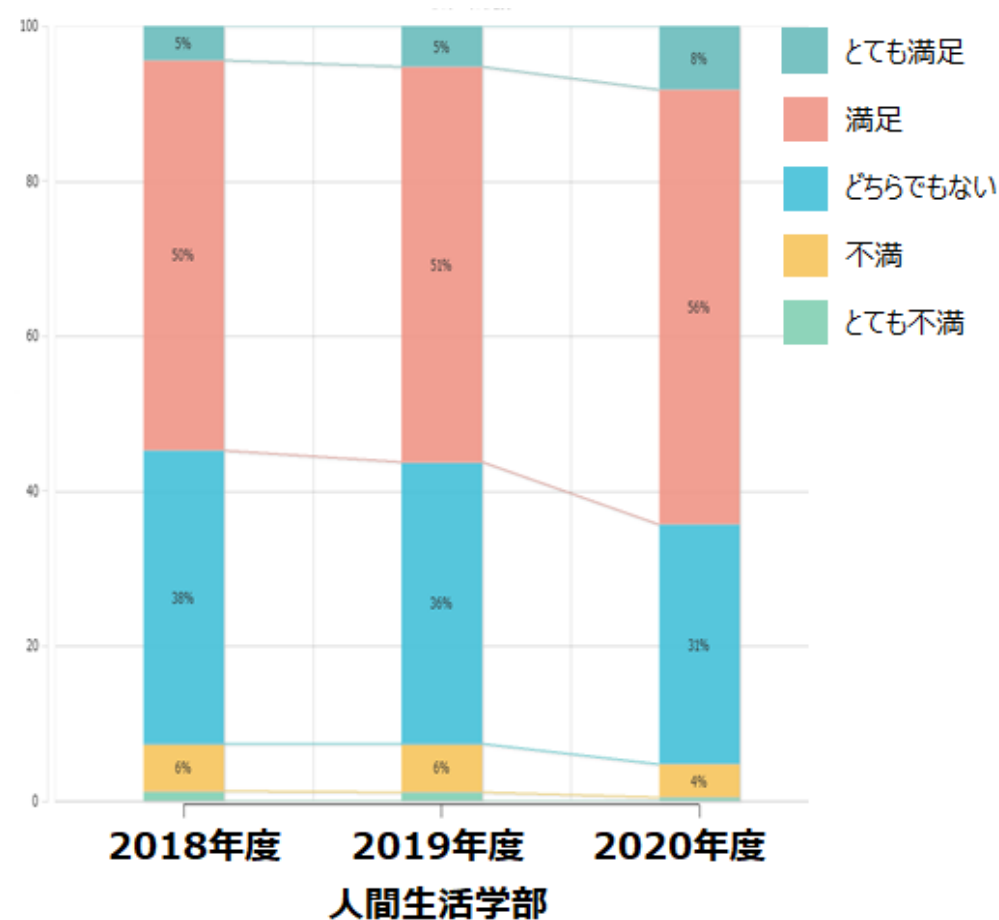
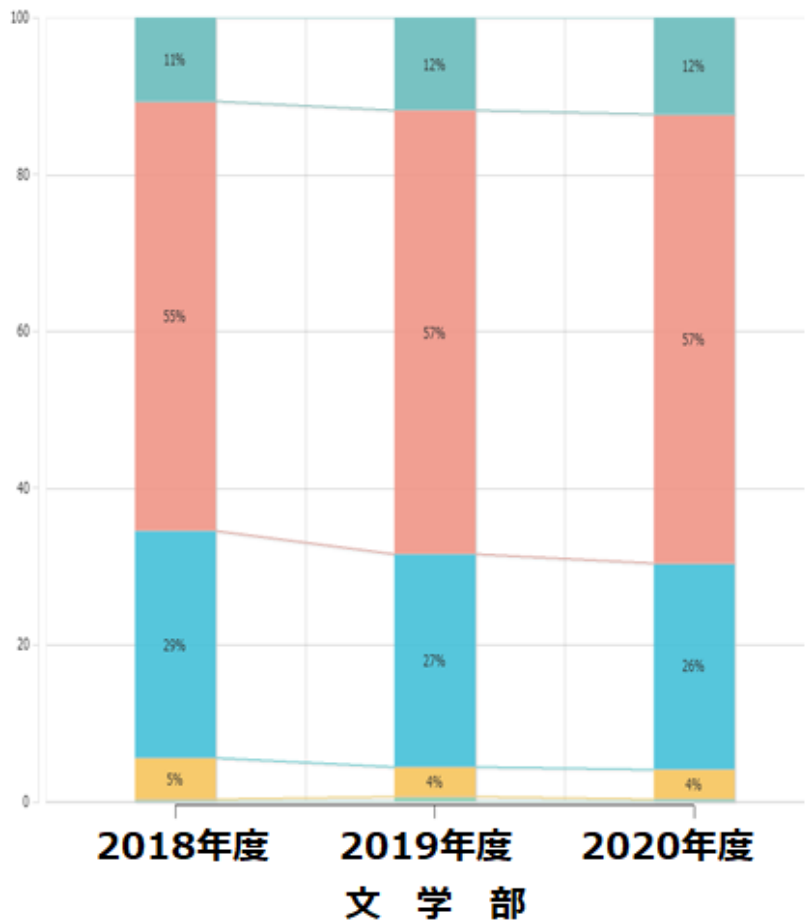


### 【コメント】

過去3年間の変化をみると、文学部では「とても満足」も「満足」も年々増加しており、2020年度では合わせた割合が83ポイントとなるなど、演習に対して満足度が高くなっている。人間生活学部では「とても満足」と「満足」を合わせた割合が2018年度で55ポイントだったのが、2019年度・2020年度では61ポイントと増加している。「とても満足」の割合は年々増加しているため、今後は「どちらでもない」「不満」と回答する学生を減らすための工夫が必要であると思われる。

### 3-3. 授業の全体的な質

[Q12-C]

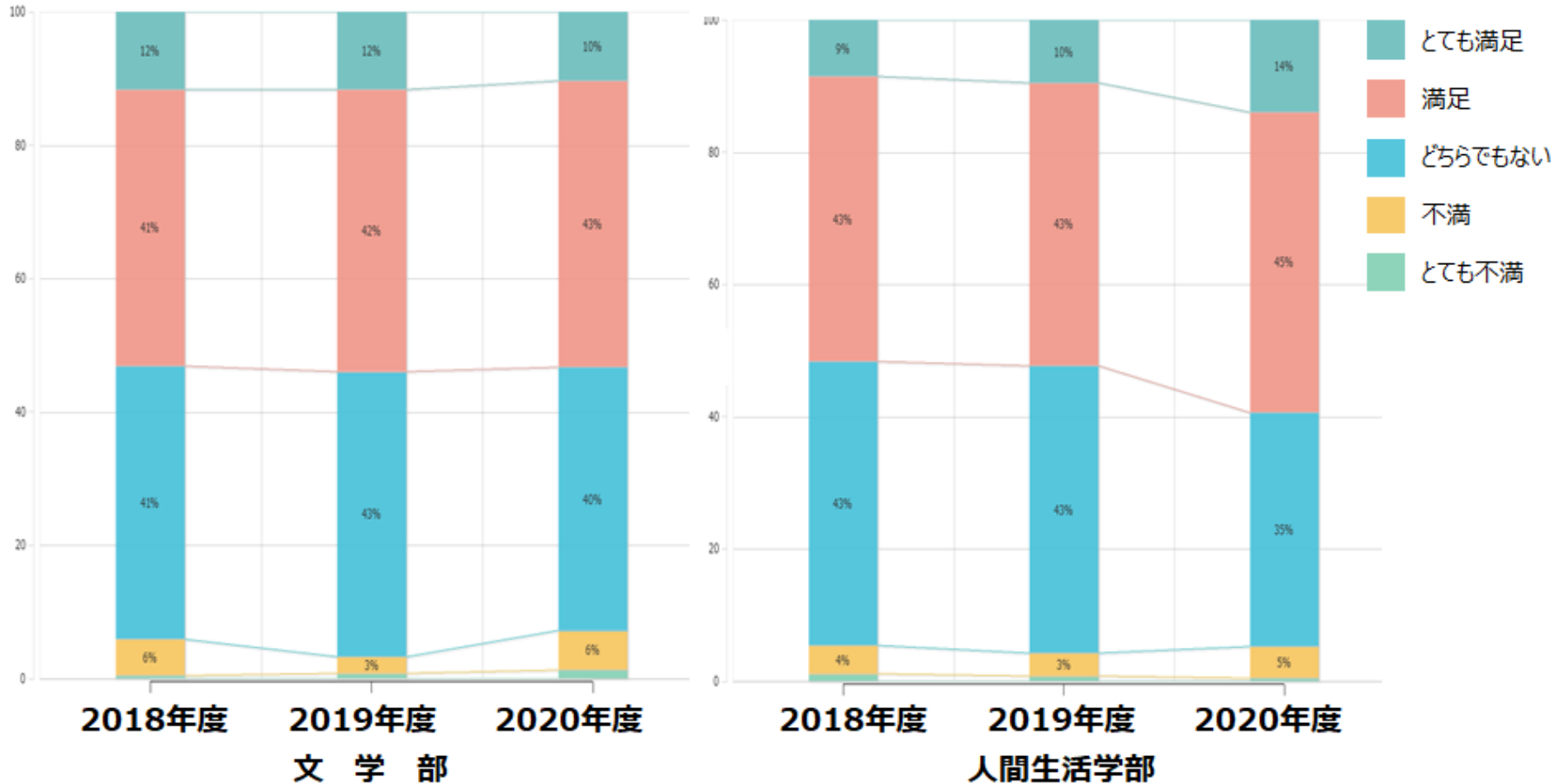


#### 【コメント】

過去3年間の変化をみると、文学部では「とても満足」と「満足」を合わせた割合2018年度で66ポイントだったものが2019・2020年度では69ポイントとなっており、微増している。人間生活学部では「とても満足」と「満足」を合わせた割合が年々増加しており、特に2020年度では合わせた割合が、前年度と比較して8ポイント増加している。

### 3-4. 教員と話をする機会

[Q12-F]

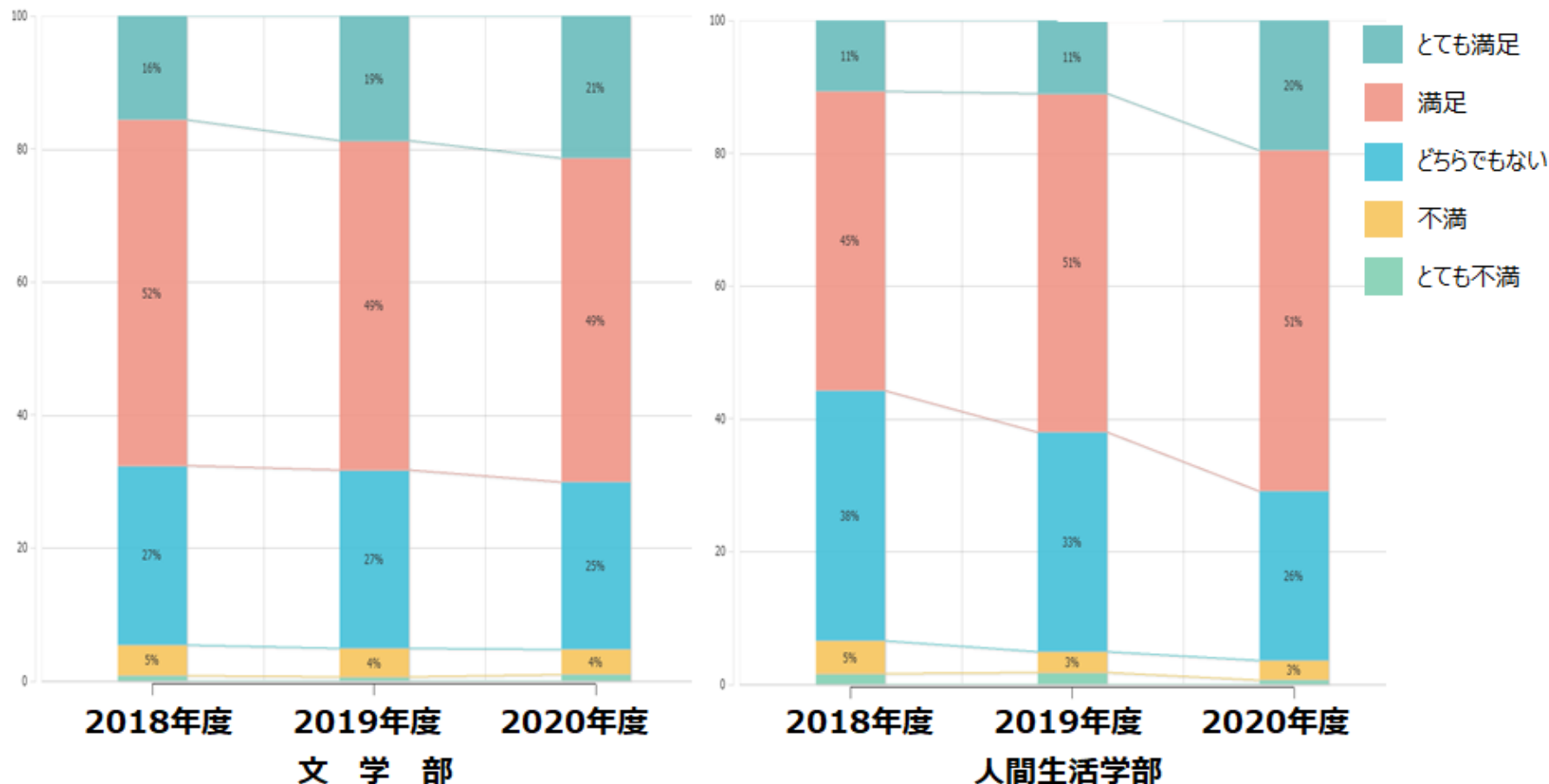


**【コメント】**

過去3年間の変化をみると、文学部では「とても満足」と「満足」を合わせた割合がほぼ変化していないことがわかる。今後は「どちらでもない」「不満」と回答する学生を減らすための工夫が必要であると思われる。人間生活学部では2018・2019年度では「とても満足」と「満足」を合わせた割合がほぼ変化していない一方で、2020年度では「とても満足」が前年度と比較して10ポイント増加しており、その結果「どちらでもない」と回答した学生も8ポイント減少している。

### 3-5. 多様な考え方を認め合う雰囲気

[Q12-J]



#### 【コメント】

過去3年間の変化をみると、文学部では「とても満足」の割合が年々増加しており、「満足」と合わせた結果も高い割合を維持している。人間生活学部では2018年度には文学部と比較しても12ポイント低い状況であったが、2019年度・2020年度と年々増加し、2020年度では「とても満足」が前年度と比較して9ポイント増加しており、文学部とほぼ同じ水準になっている。

2020年度では文学部の「2年次または3年次を対象としたゼミ（演習）など」、人間生活学部の「専門教育あるいは所属学科の授業」「教員と話をする機会」における満足度が前年度よりも高いという結果だった。コロナ禍においても、質の高い授業が提供できていることは、各教職員による日々の努力・工夫の結果であると考えられる。今後も授業内容の見直しやFD研修等で、教育の質の更なる向上を図ることが期待される。

過去3年間における調査結果の比較では、3-1～3-5の全質問で、「とても満足」と「満足」を合わせた回答が占める割合はほぼ増加し、一部横ばいとなった。特に、人間生活学部において、2020年度の伸びが大きく、3-2以外の4項目において10ポイント前後の増加があり、これまで文学部と差があった項目についても、同様の水準となったものが見られた。

## 4. 設備・制度への満足度

**Q. あなたは本学の設備や学生支援制度にどの程度満足していますか。**

4-1. 図書館の設備（蔵書やレファレンスサービス）

4-2. コンピュータの施設や設備

4-3. 奨学金などの学費援助の制度

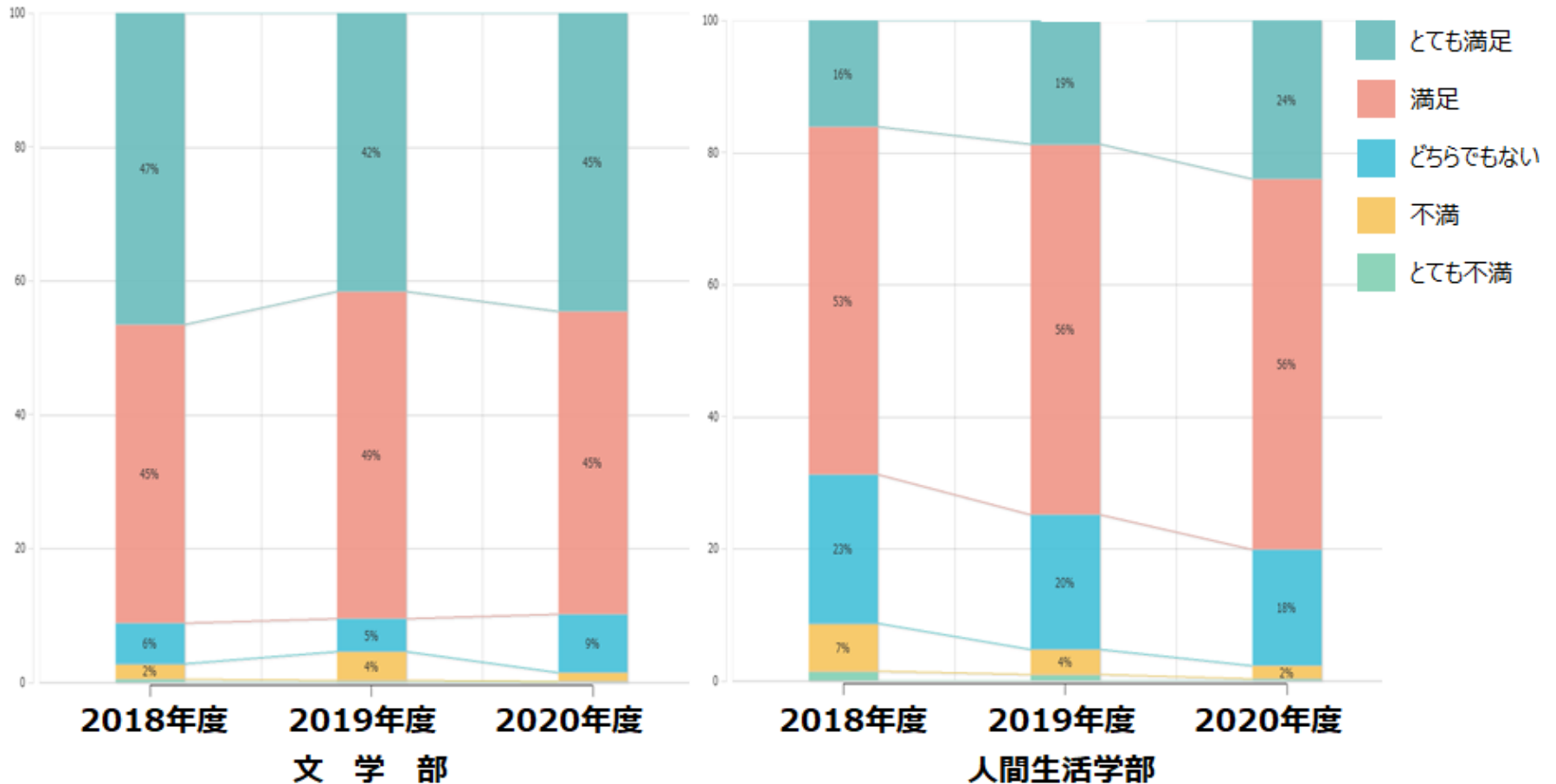
4-4. 健康・保健サービス（心身の健康に関わる問題についての診療や相談）

4-5. キャリアカウンセリング（就職や進学に関する相談）



## 4-1. 図書館の設備（蔵書やレファレンスサービス）

[Q13-A]

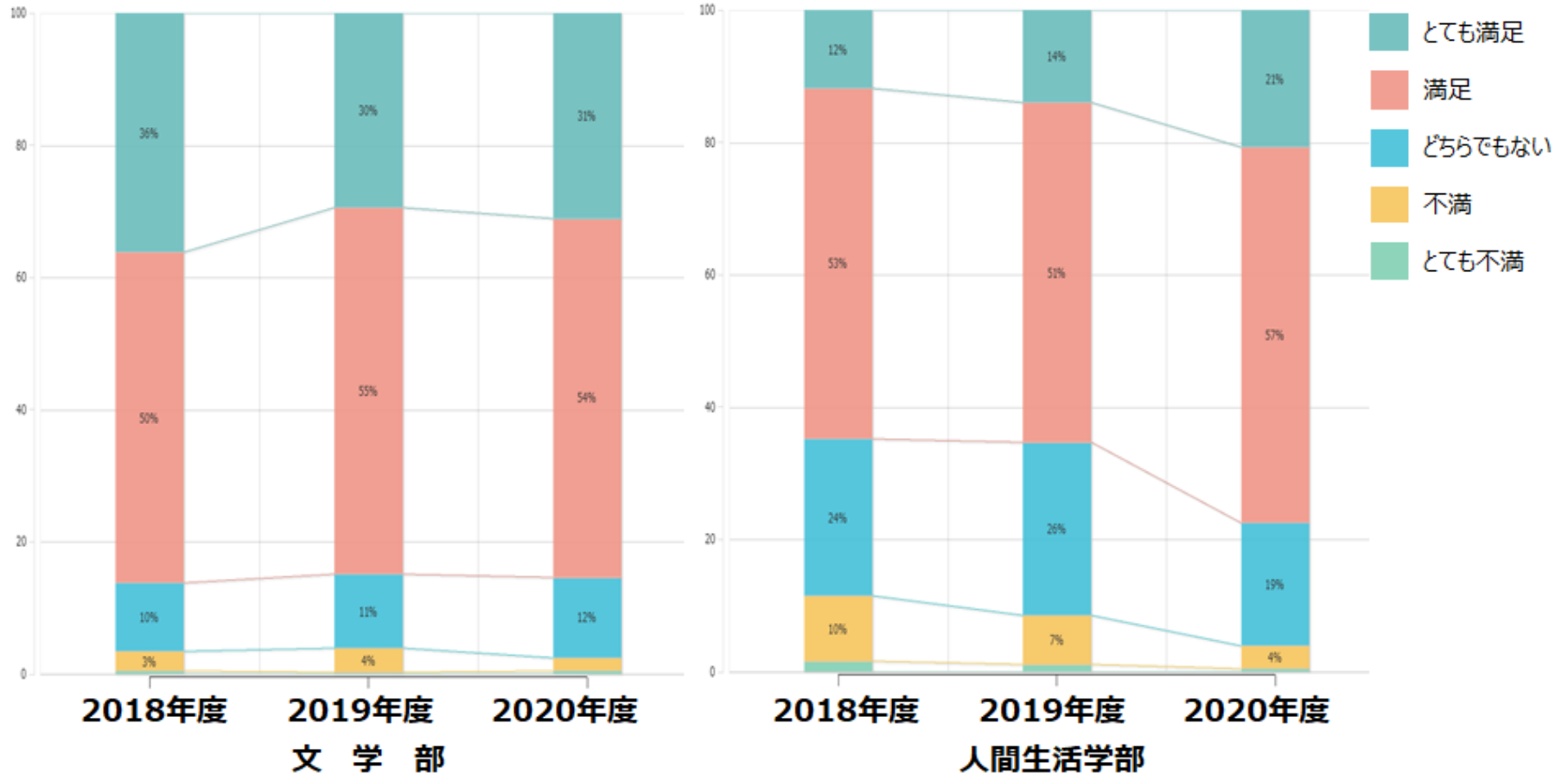


### 【コメント】

コロナ禍において、両学部図書館では送料図書館負担の郵送貸出や、メールでのレファレンス受付、他大学資料の取り寄せ費用の図書館負担など、オンライン学習支援のため、可能な限り学生のためのサービスを実施した。特に、人間生活学部学生にとっては、花川キャンパスまで登校しなくても本が自宅に届いたり、実習施設近くの実家でも使用する資料が受け取れるなど、利便性が高く感じられたと思われる。

## 4-2. コンピュータの施設や設備

[Q13-C]

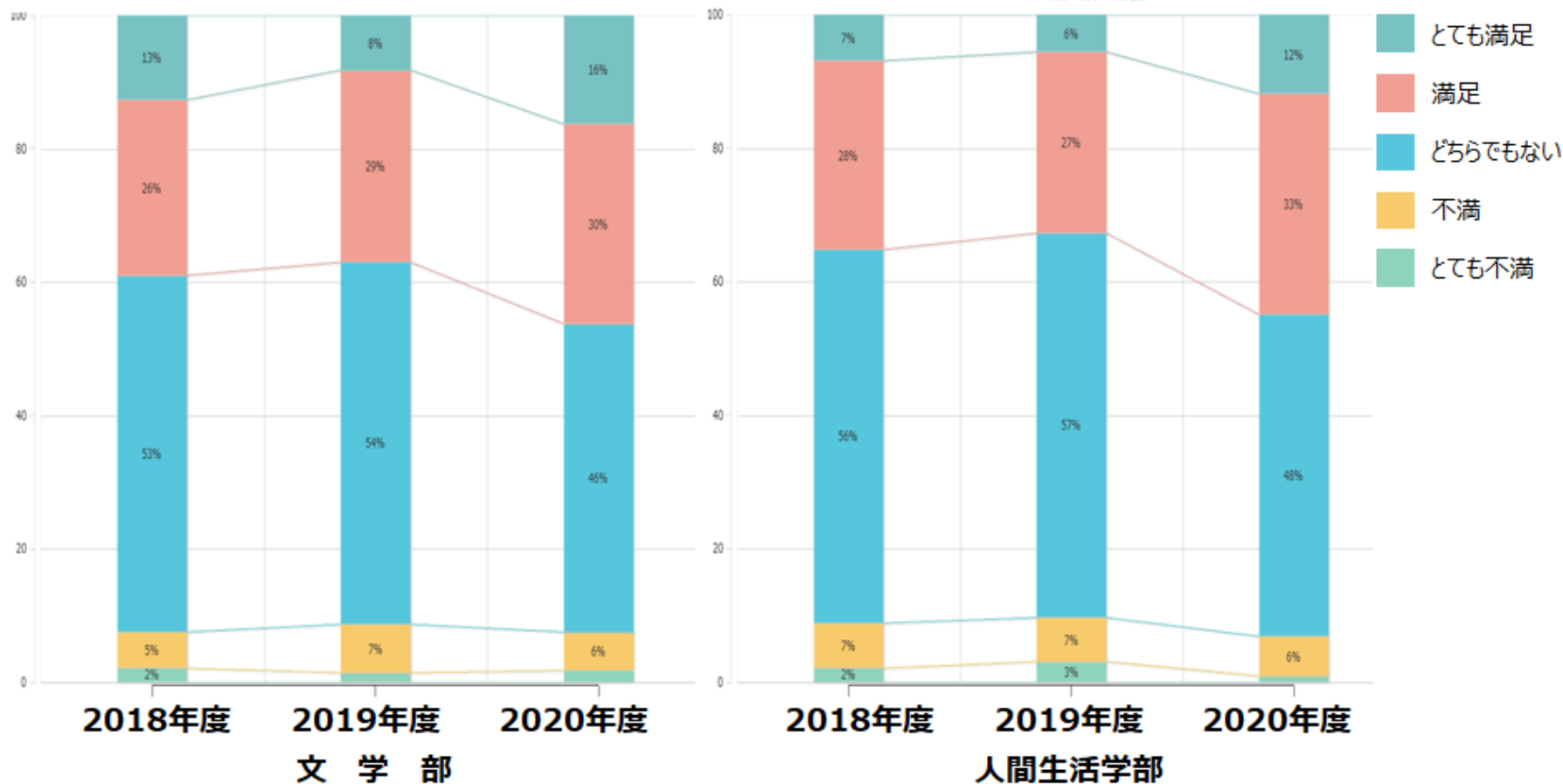


### 【コメント】

文学部に関しては経年変化は大きく変わらず満足度の高さが伺える。  
人間生活学部が2020年度に大きく満足度を高めた要因として、Wifiのアクセスポイントを従来よりも数多く設置し広範囲に電波が届くようになり学生の利便性が高まったと考えられる。またコロナ禍においても学部の性格上登校する機会が多い中、普通教室にパソコンを配備したことも満足度を高めた要因と考えられる。

## 4-3. 奨学金などの学費援助の制度

[Q13-F]

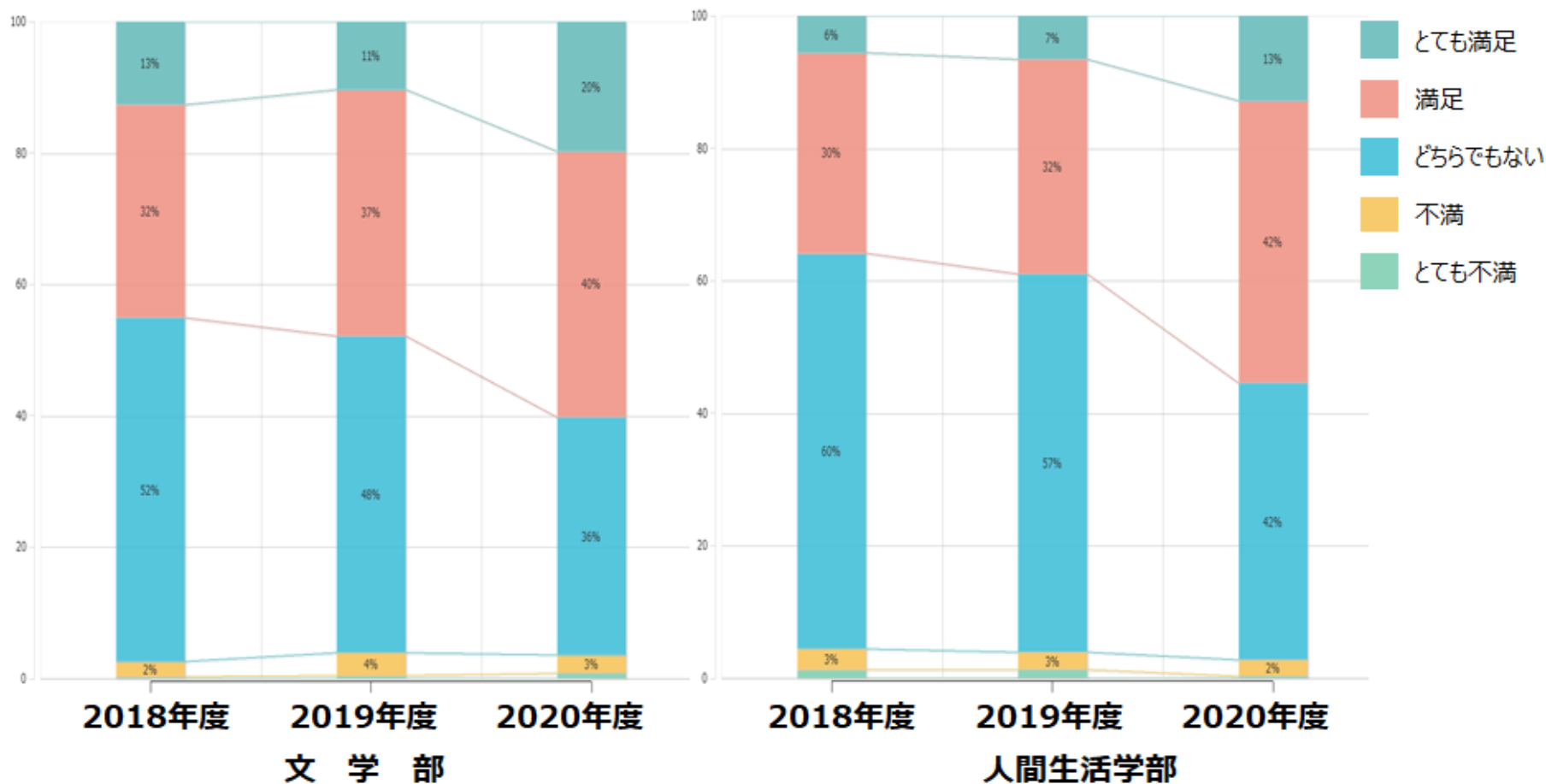


### 【コメント】

両学部とも満足度が上昇している。これは、2020年度から高等教育の修学支援新制度が開始したことに加え、2020年度に非対面授業下における学修環境整備を主な目的とした本学独自の「学修環境整備奨学金」を全学部生対象に給付したことが要因と考えられる。

## 4-4. 健康・保健サービス（心身の健康に関わる問題についての診療や相談）

[Q13-G]



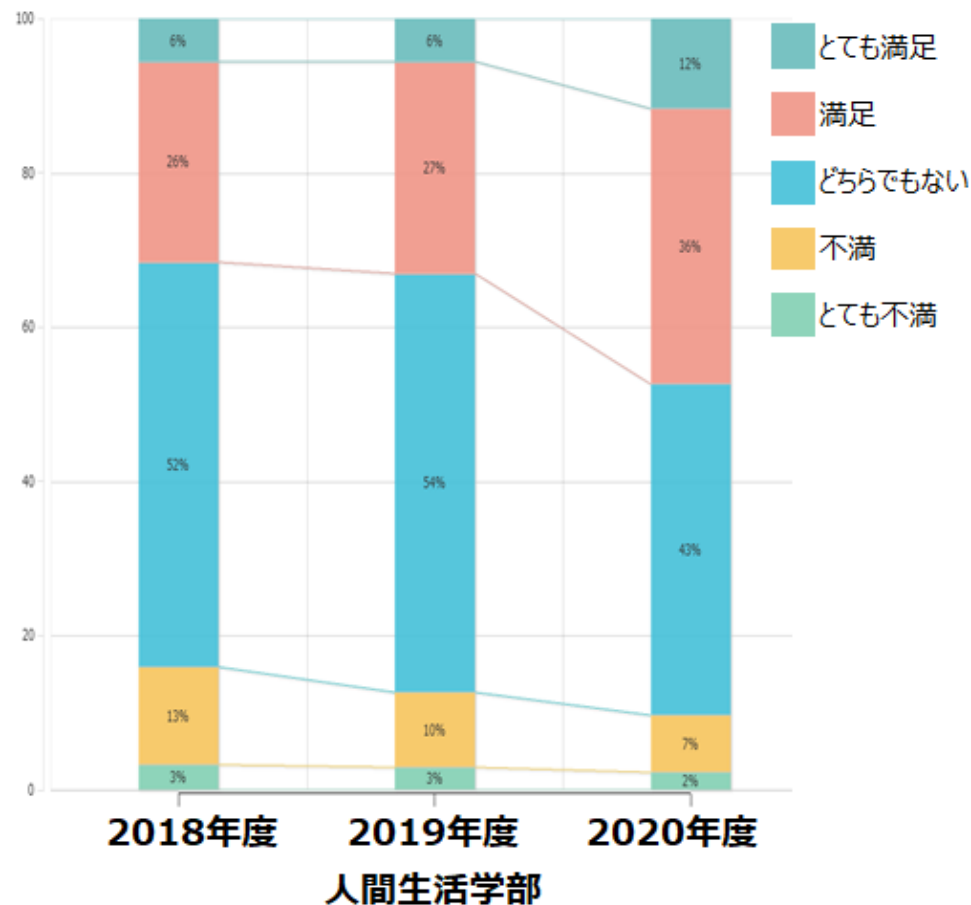
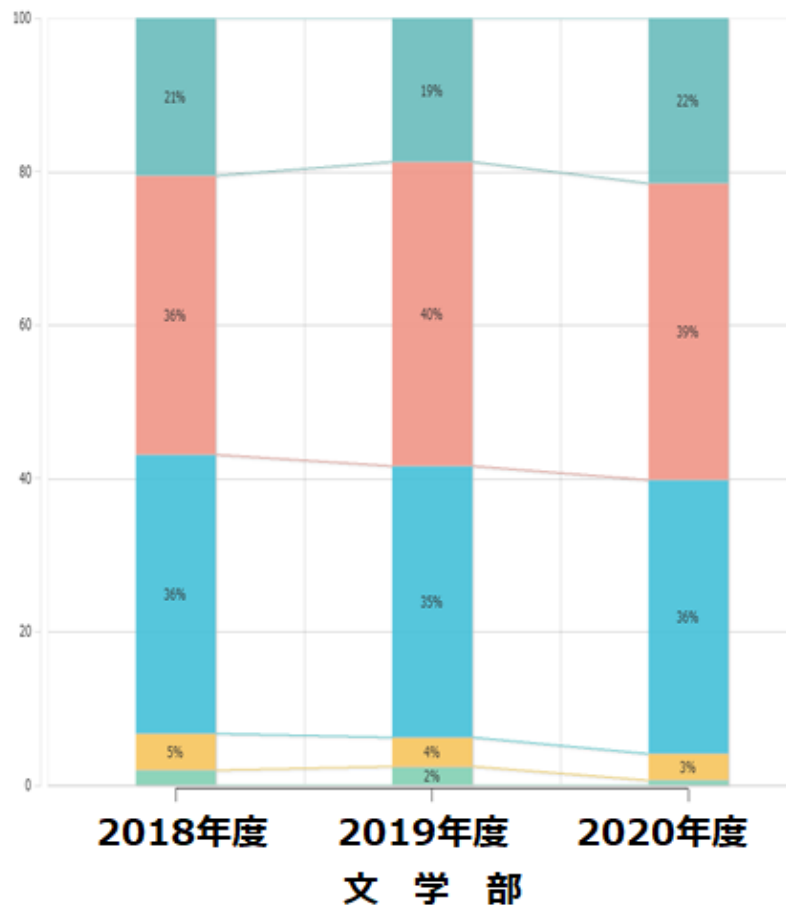
### 【コメント】

両校舎とも、満足度が上昇した。どちらでもないと答えた学生の減少がみられることから、コロナ禍により電話相談などで保健センターを利用した学生が、満足と回答したことが考えられる。

学生相談室、保健センターでは、学生に関わる教職員との連携も密にしており、画一的ではなく、個々に応じたケアを心がけていることが、満足度上昇の大きな要因と考えられる。

## 4-5. キャリアカウンセリング（就職や進学に関する相談）

[Q13-I]



### 【コメント】

前年度比、文学部2ポイント増、人間生活学部15ポイント増。理由は大きく2点と考察。

①コロナ禍により非対面となってもきめ細やかな個別対応とより親身な指導、情報発信を行ったこと。

②Zoomを使用し、両学部で同じ就職支援講座を受講できるメリットから花川キャンパスの立地条件（交通手段や冬期天候など）の不満が解消されたこと。※V講時の講座が対面（校舎）で実施の場合、アルバイトに遅れるなど不都合も生じていた。

コロナ禍の中、図書館、キャリア支援、学生相談等は従来の対面方式が取れない状況から、郵送、オンライン、電話などに変えたことで満足度を下げることなく逆に高める結果となった。

制度面では本学独自の「学修環境整備奨学金」を全学部生対象に給付することで、学生達はオンライン授業に臨むことができたと思われる。

今回は「設備・制度」といったフィジカルな側面から、登校できない環境下でそれらをどのように学生達へ提供するかといったサービス面に視点を変えたことにより、本学の特徴でもある「きめ細やかな学生サポート」として学生達から支持されたと思われる。

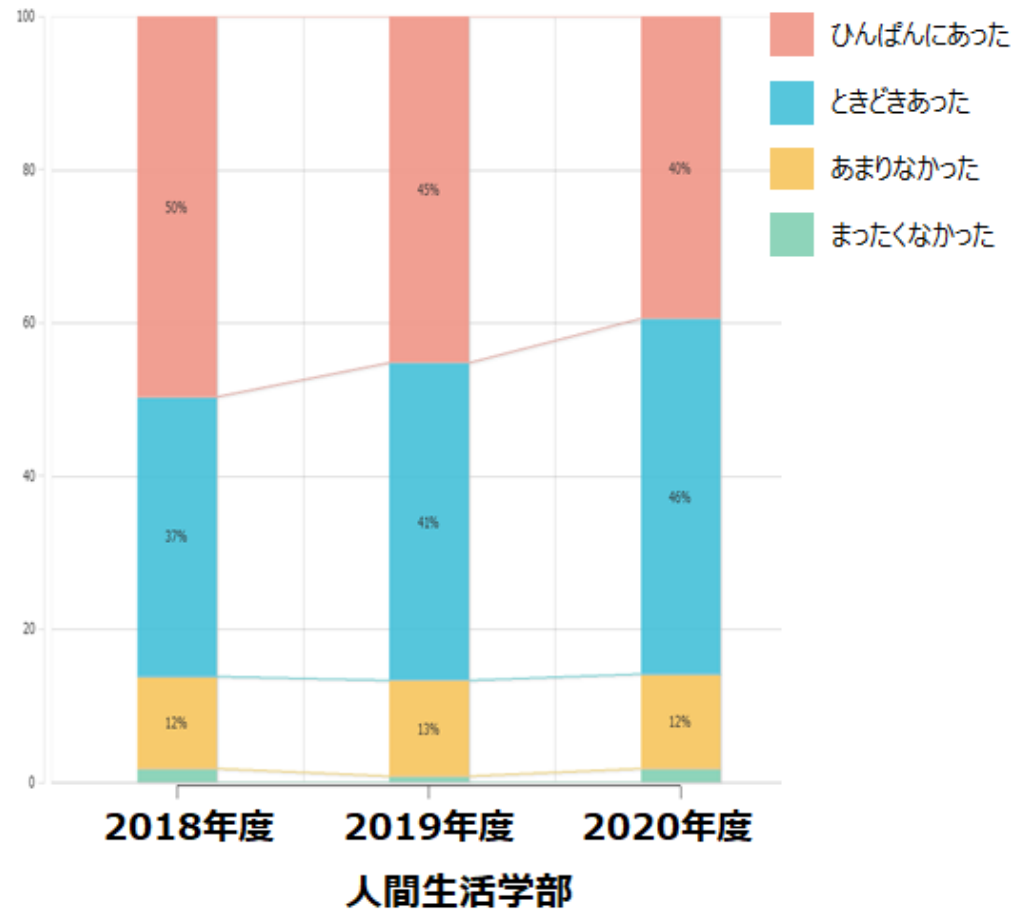
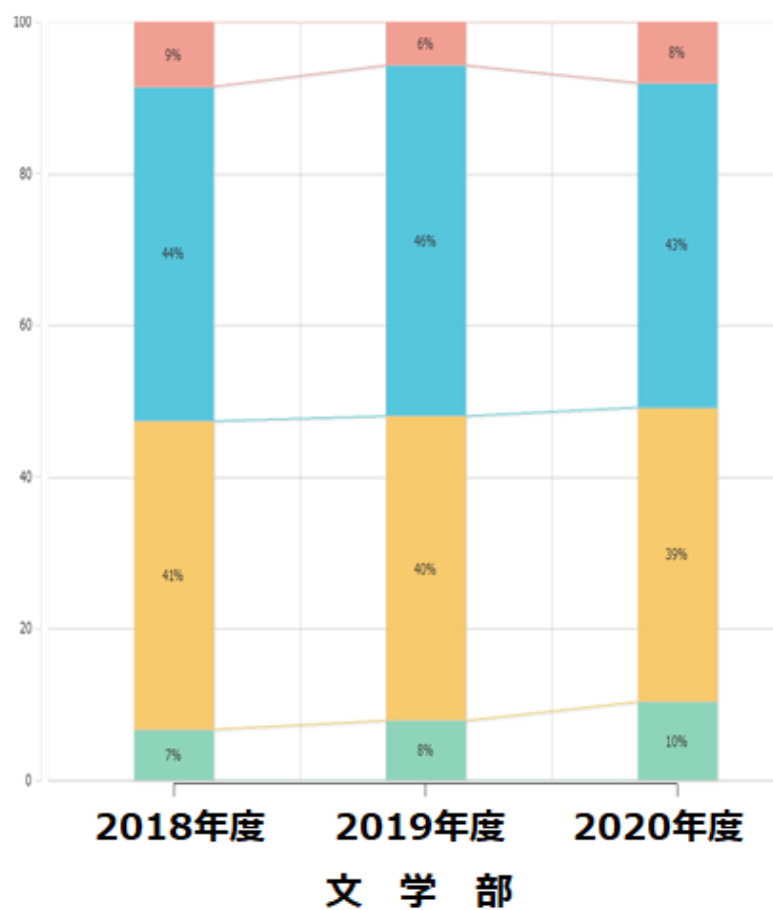
# 5. 授業での経験

**Q. あなたが受講した大学の授業で、次のようなことを経験する機会はどのくらいありましたか。**

- 5-1. 仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ
- 5-2. 授業内容と社会や日常生活のかかわりについて、教員が説明する
- 5-3. 学生自身が文献や資料を調べる
- 5-4. 学生が自分の考えや研究を発表する
- 5-5. 授業中に学生同士が議論をする
- 5-6. TAやSAなどの授業補助者から補助を受ける

## 5-1. 仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ

[Q4-B]



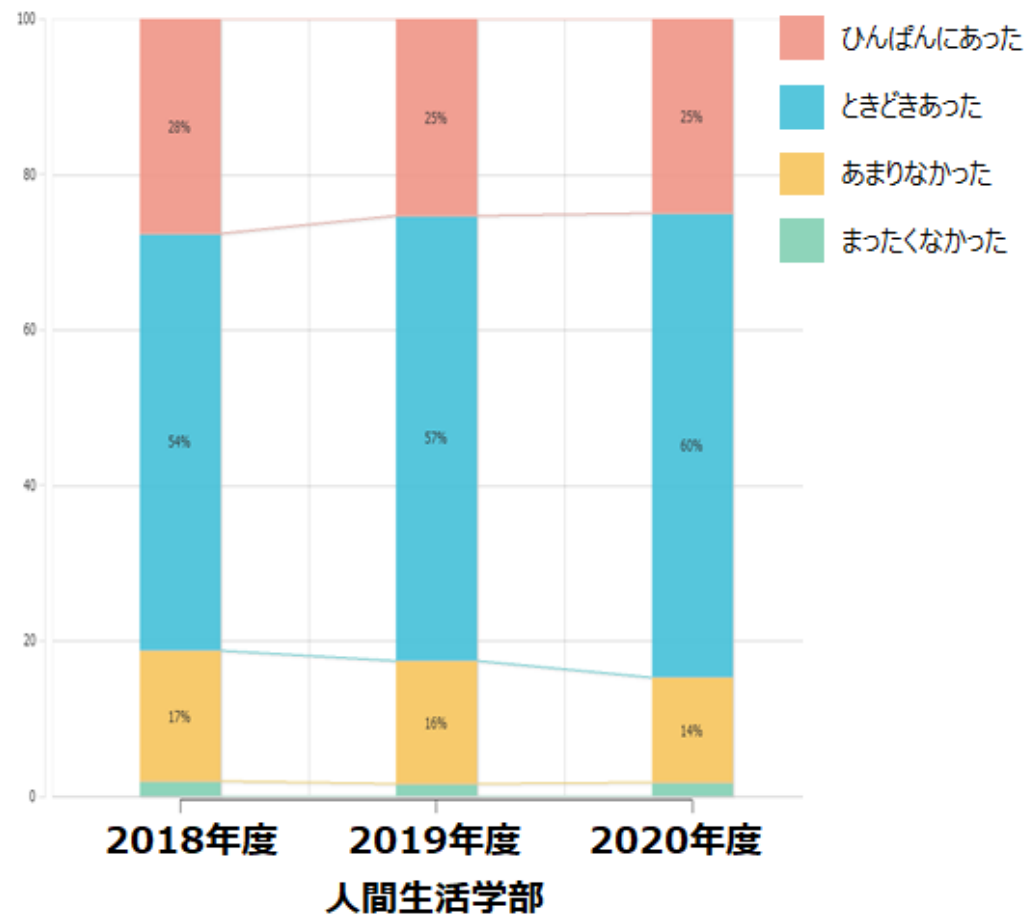
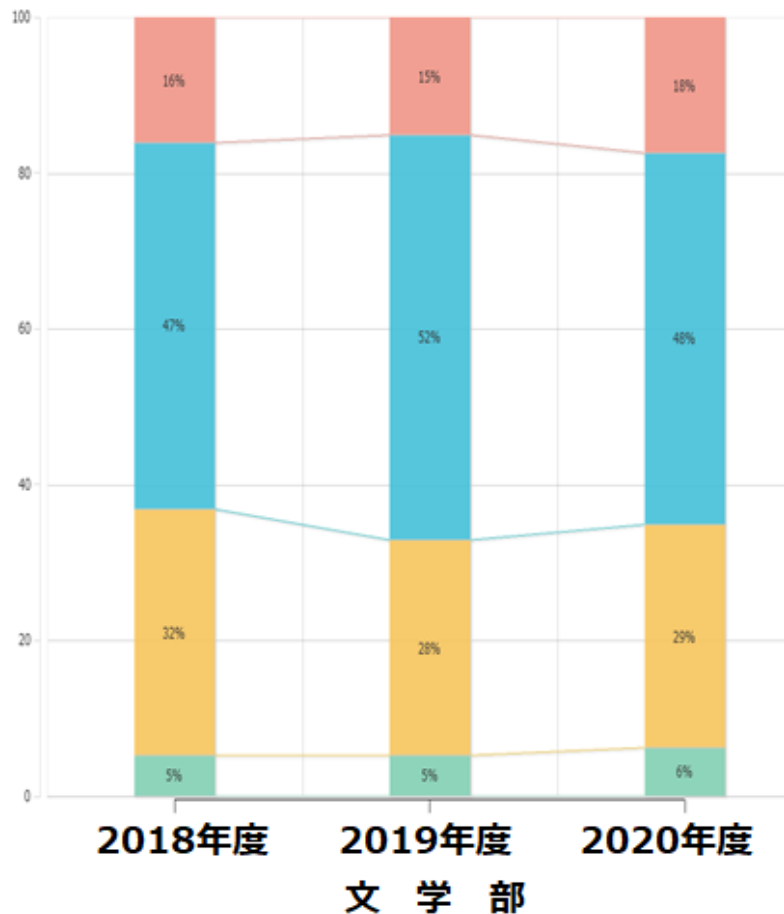
### 【コメント】

人間生活学部では「ひんぱんにあった」が2020年にかけて減少したのに対し、逆に「とくどきあった」は増加傾向が見られた。このことから、仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ度合いは対面授業（2018, 2019年）と比べ、非対面授業（2020年）では低下することがわかった。一方、文学部では年度による顕著な変化は見られなかった。



## 5-2. 授業内容と社会や日常生活のかかわりについて、教員が説明する

[Q4-C]

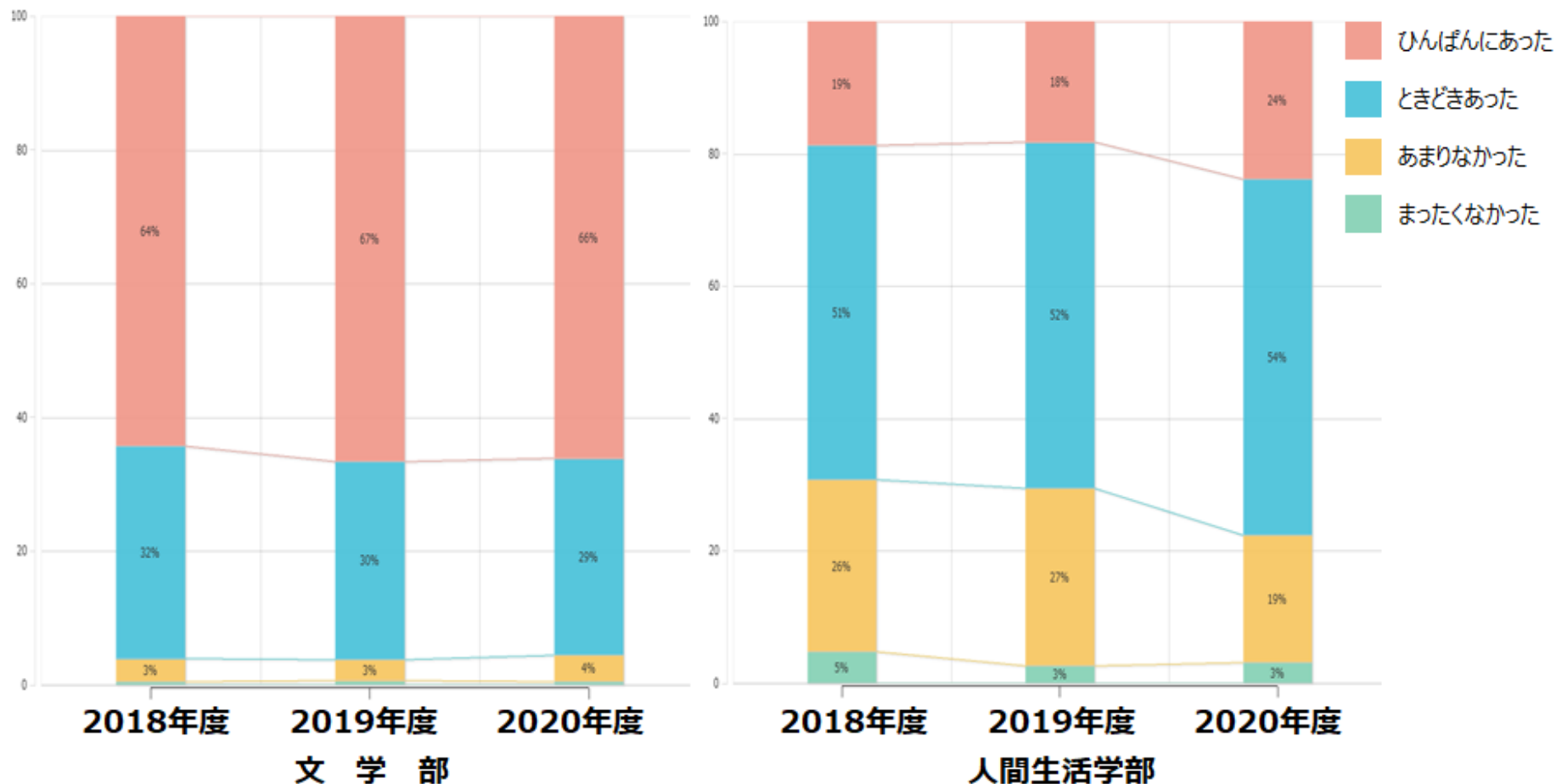


### 【コメント】

文学部よりも人間生活学部において「ひんぱんにあった」「ときどきあった」の割合が高い。人間生活学部では資格取得に必要な授業が多く、教員の実務経験を授業内容と関連づけて説明する必要があるため、このことは当然の結果と言える。経年比較では両学部とも変化は見られず、対面・非対面に関わらず実施されていることが伺える。

## 5-3. 学生自身が文献や資料を調べる

[Q4-E]

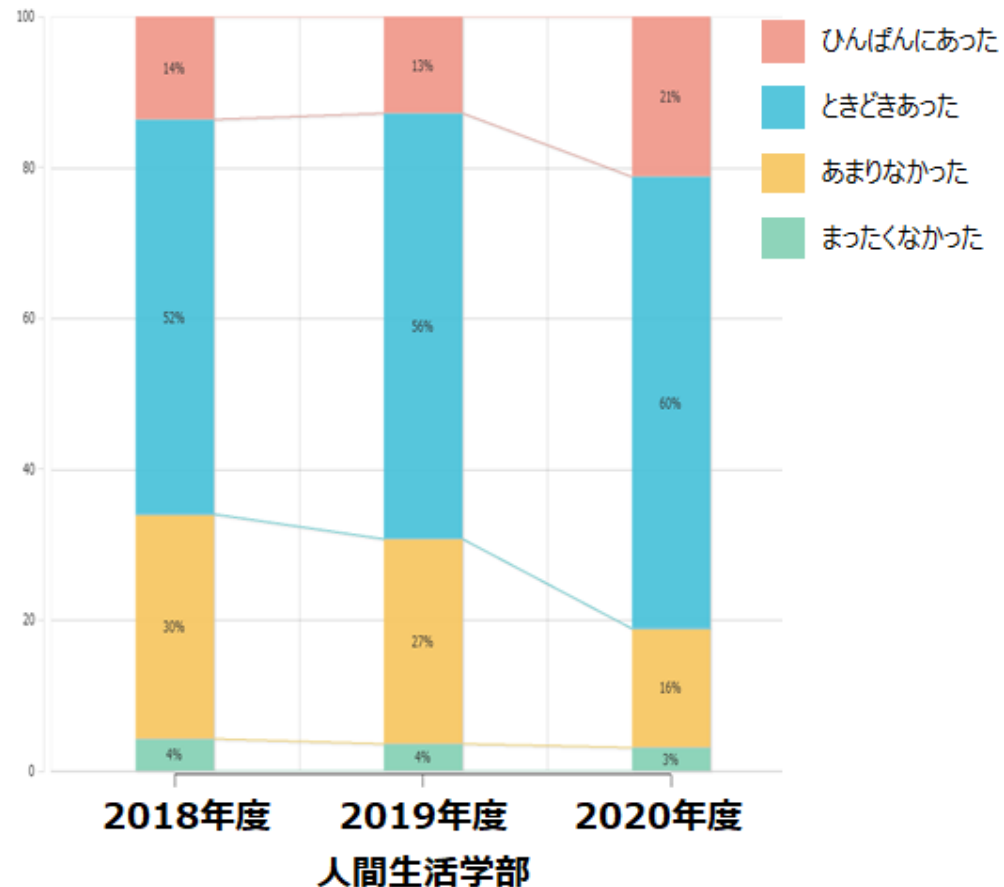
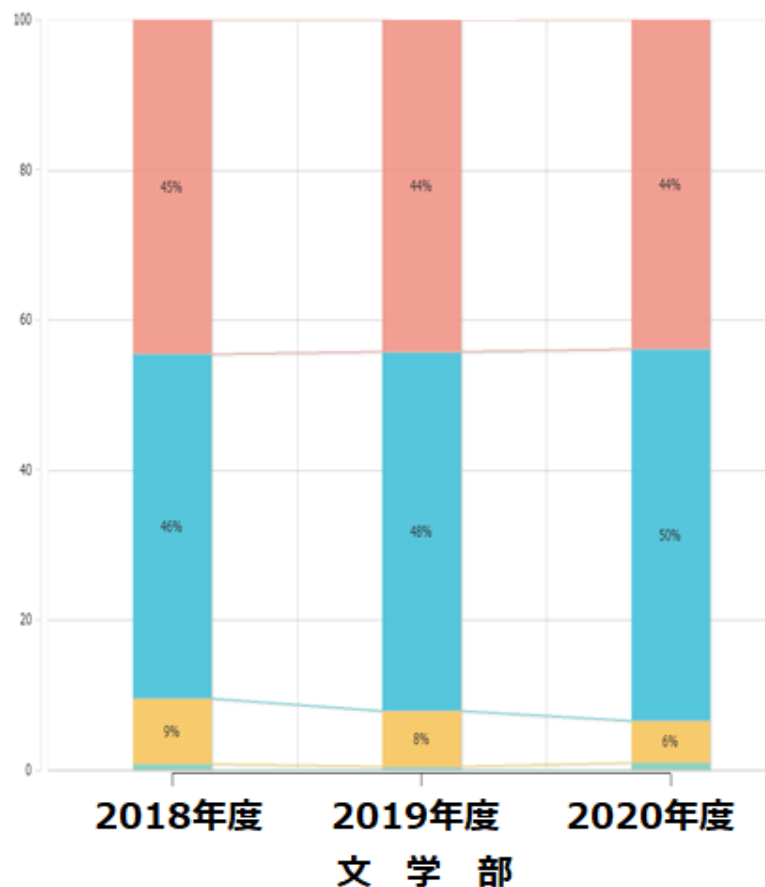


### 【コメント】

文学部の学生は90%以上が「ひんぱんにあった」「ときどきあった」と回答しており、年度による違いは見られなかったことから、日頃から図書館などを活用して自ら文献や資料を調べるような指導が行われていることが伺える。一方、人間生活学部では2020年にはこれらの割合が70%から80%に増加していることから、課題への取り組みなど自主学習の機会の増加に伴い、インターネットなどを利用して自ら調べる必要に迫られたと考えられる。

## 5-4. 学生が自分の考えや研究を発表する

[Q4-H]

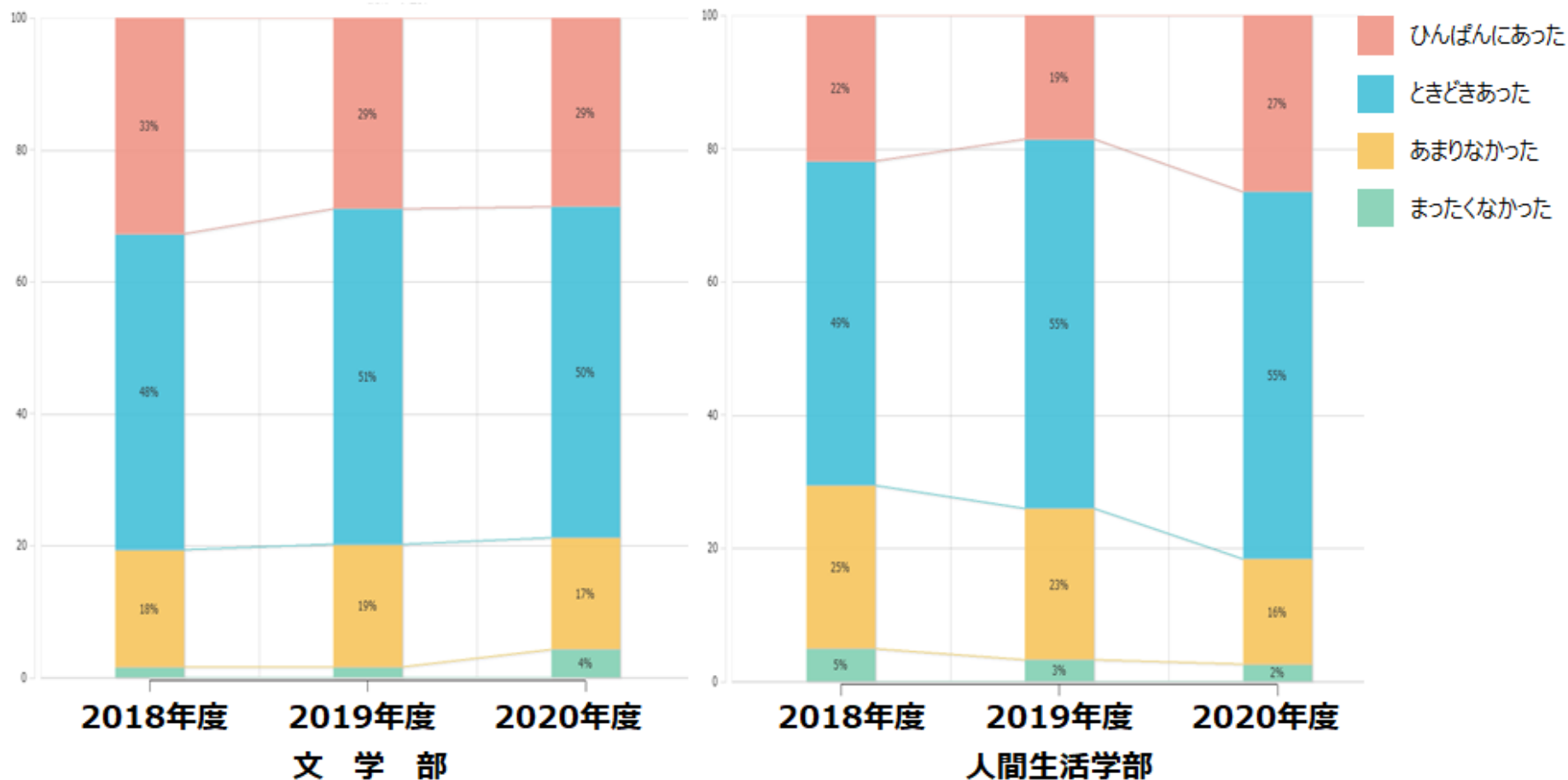


### 【コメント】

5-3と同様に文学部の学生は90%以上が「ひんぱんにあった」「ときどきあった」と回答しており、年度による違いは見られないため、ゼミなどで頻りに自分の考えや研究について発表する経験があることがわかる。一方、人間生活学部では2020年度は約10%増加しており、オンラインやオンデマンドによる発表の機会が増えたと考えられる。

## 5-5. 授業中に学生同士が議論をする

[Q4-I]

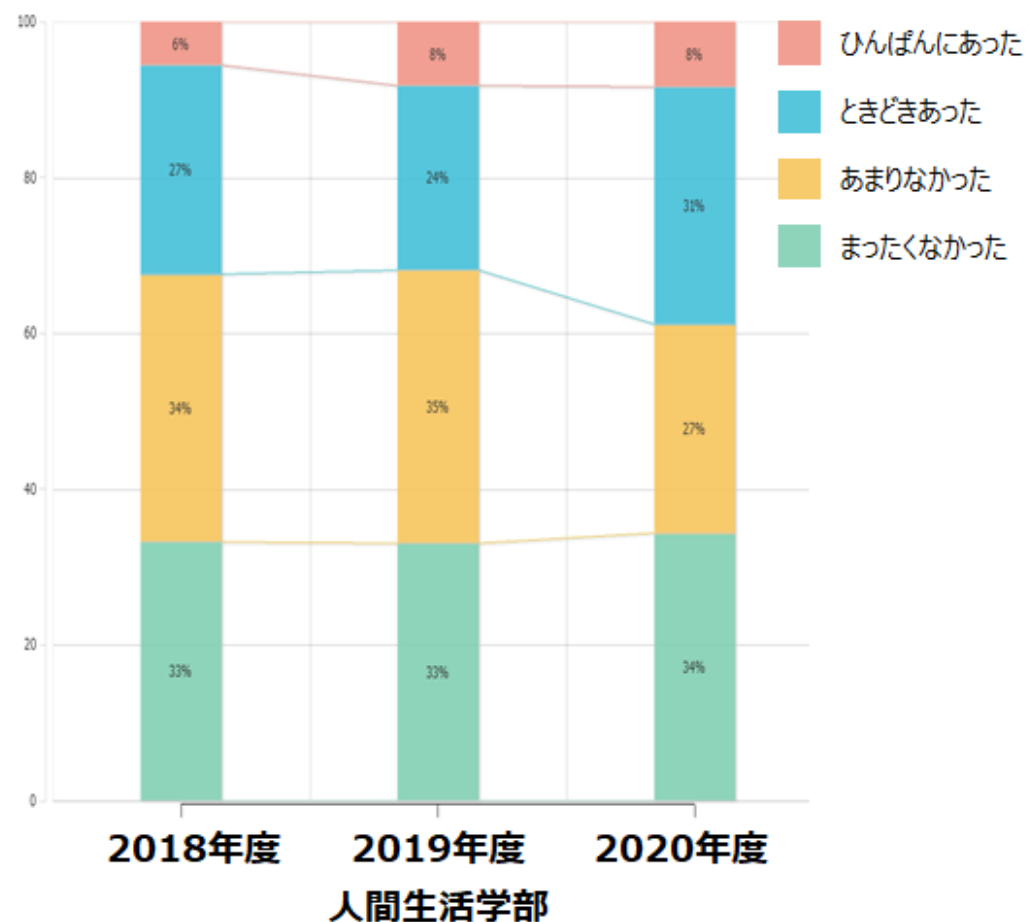
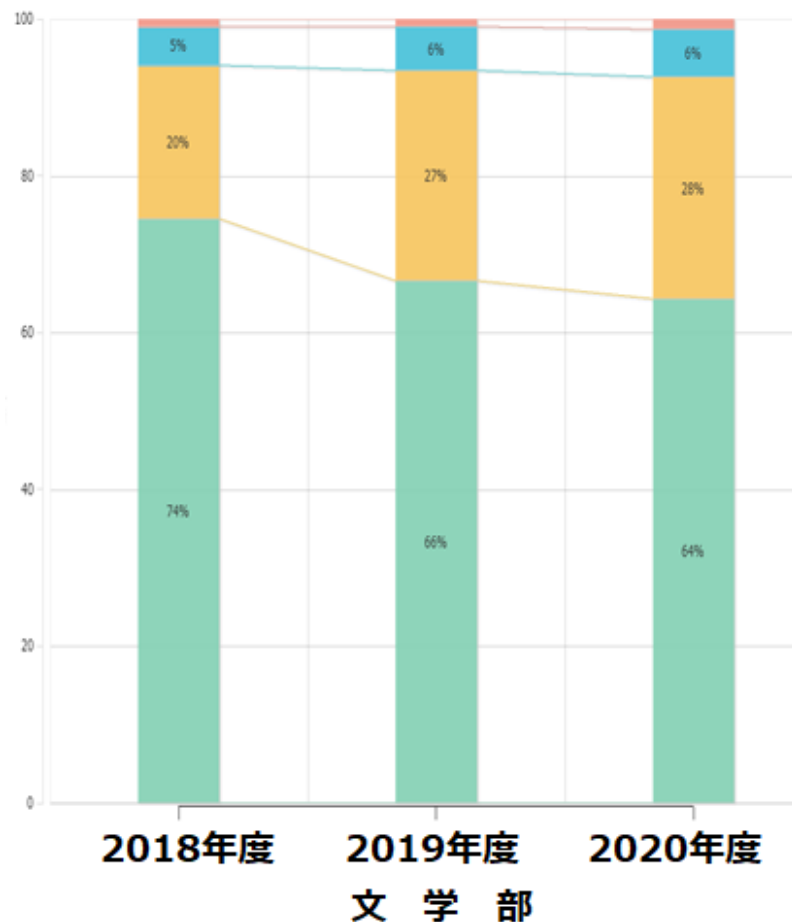


### 【コメント】

文学部ではゼミなどの少人数での授業が多く、学生同士で議論する経験が得られていることがわかる。コロナ前は、人間生活学部の方が文学部よりも学生同士の議論の機会が少なかったことが伺えるが、2020年度では前年度よりも10%ほど増加した。オンライン授業導入に伴い、Zoomのブレイクアウトルーム機能の活用などにより、非対面時においても学生間の意見交換やグループワークなどを行う機会が増えたためと考えられる。

## 5-6. TAやSAなどの授業補助者から補助を受ける

[Q4-N]



### 【コメント】

人間生活学部では、2020年度において「ひんぱんにあった」「ときどきあった」と回答が増加している一方、文学部では「あまりなかった」「まったくなかった」と回答する学生が90%以上を占め、学部間の違いがあるように見える。人間生活学部では大学院生のTAによる実験・実習補助などが反映されている可能性もあることから、このデータだけでは文学部においてSAが浸透していないと判断することはできない。更なる分析が必要であると考えられる。

2020年はコロナ禍により、前期から授業開始の遅れや学内への立ち入り制限、授業形態が非対面となるなど、授業の実施に与える影響が大きい1年だったと言える。そのような中、今回のアンケート結果からは、「授業での経験」に関しては、文学部ではその影響が少なく、人間生活学部でいくつかの変化が見られた。

文学部の授業では、①入学後の早い段階から、図書館や文献を活用する能力を身につけ、それを習慣化するよう促していること、②普段から学生同士で考えを述べ合う機会が与えられていることなどが考えられる。このような成果をベースに、少人数での授業が多い文学部においては、オンラインなどの非対面においても学生一人ひとりに目が届きやすく、習熟度に応じた対応や指示が可能であったため、学生の授業での経験には比較的影響が少なかったことが推察される。

一方、人間生活学部の講義科目は受講生が多く、また実験や実習、演習などの授業は非対面での実施が困難であるなどの理由から、専門的な知識やスキルの修得に影響が生じた可能性がある。また、自ら資料を調べる機会や考えをまとめて発表する機会、学生同士の議論の機会がそれぞれ増えたが、今回の結果からは、「教員が授業を補完するために課題が増えたためなのか」、「議論や発表の内容は対面で実施する場合と質的に変わらないのかどうか」などがわからないため、必ずしも良い効果が得られているとは限らない。

いずれの結果に関しても、非対面授業のメリットとデメリットを学生一人ひとりの成長過程から見出し、今後の教育にフィードバックしていくことが求められる。

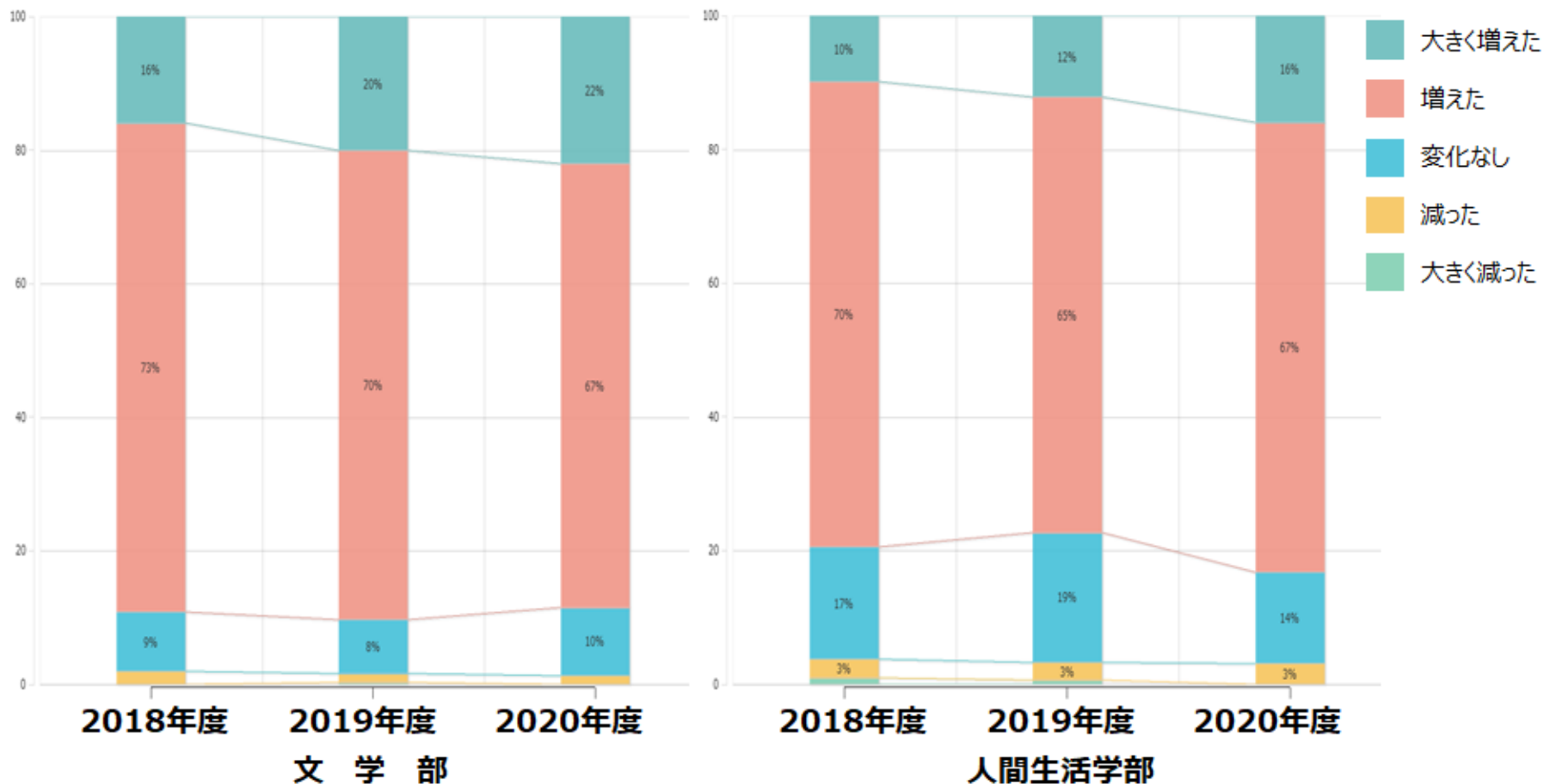
# 6. 能力の変化

**Q. 入学した時点と比べて、あなたの能力や知識はどのように変化しましたか。**

- 6-1. 一般的な教養
- 6-2. 分析力や問題解決能力
- 6-3. 専門分野や学科の知識
- 6-4. 批判的に考える能力
- 6-5. 異文化の人々に関する知識
- 6-6. リーダーシップの能力
- 6-7. 他の人と協力して物事を遂行する能力
- 6-8. 文章表現の能力
- 6-9. 外国語の運用能力
- 6-10. コミュニケーションの能力
- 6-11. プレゼンテーションの能力
- 6-12. グローバルな問題の理解

## 6-1. 一般的な教養

[Q7-A]



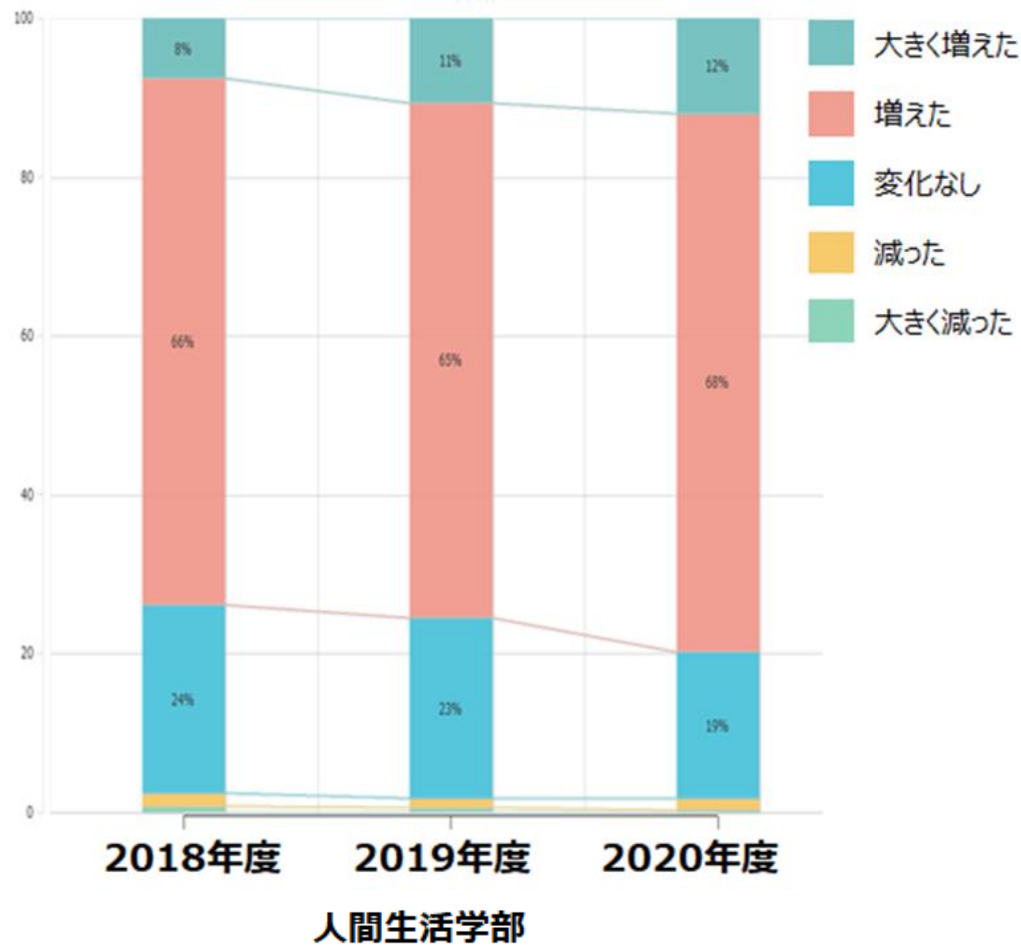
### 【コメント】

学部間での比較では文学部の方がやや高く、経年比較でもその傾向は変わらなかった。  
両学部とも「大きく増えた」が増加傾向にあるが、対面授業（2018、2019年）と非対面授業（2020年）の違いが影響しているかどうか検証を加える必要がある。



## 6-2. 分析力や問題解決能力

[Q7-B]

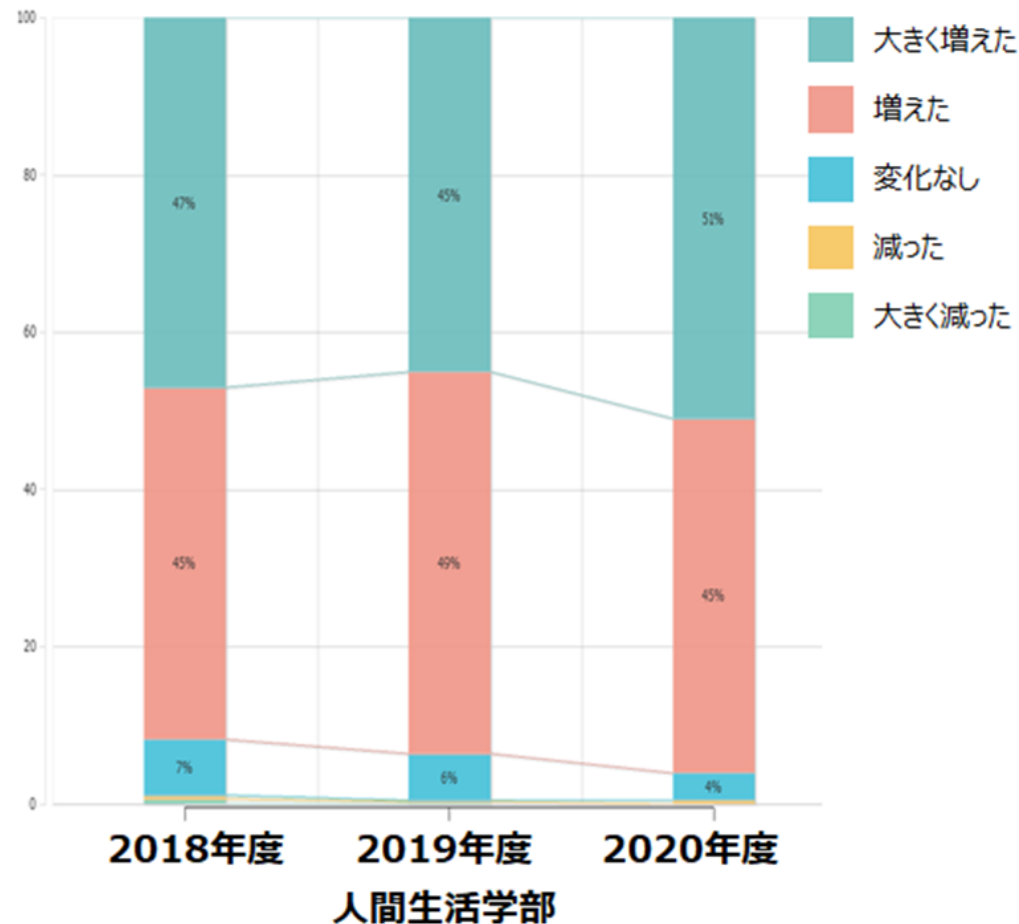
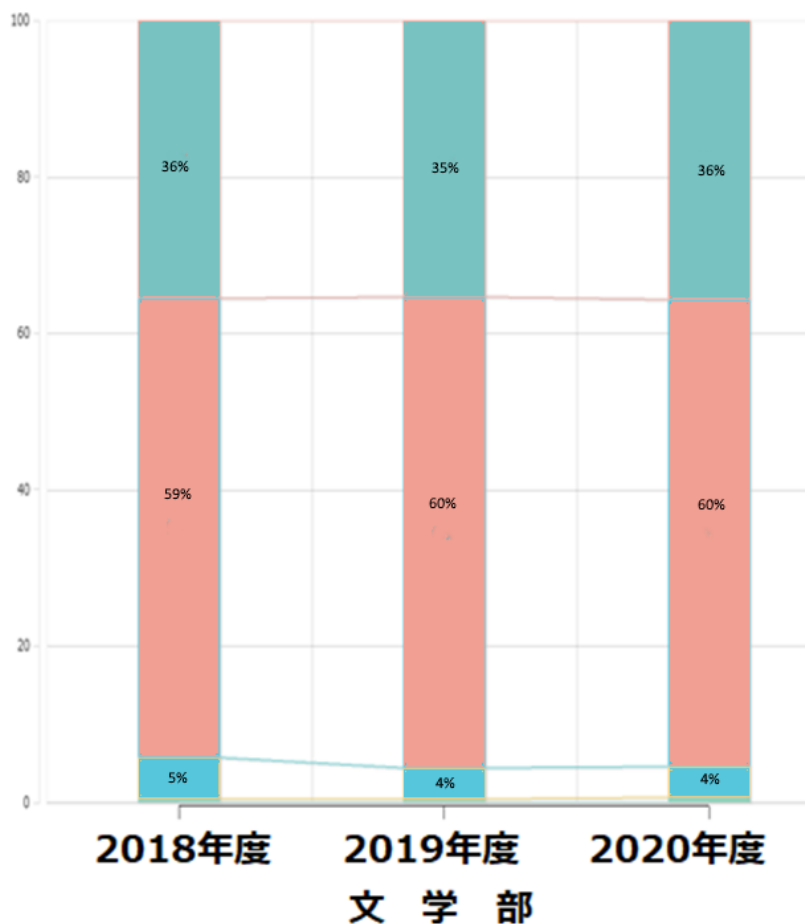


### 【コメント】

学部間での比較では文学部の方がやや高く、経年比較でもその傾向は変わらなかった。  
両学部とも「大きく増えた」が増加傾向にあるが、対面授業（2018、2019年）と非対面授業（2020年）の違いが影響しているかどうか検証を加える必要がある。

## 6-3. 専門分野や学科の知識

[Q7-C]

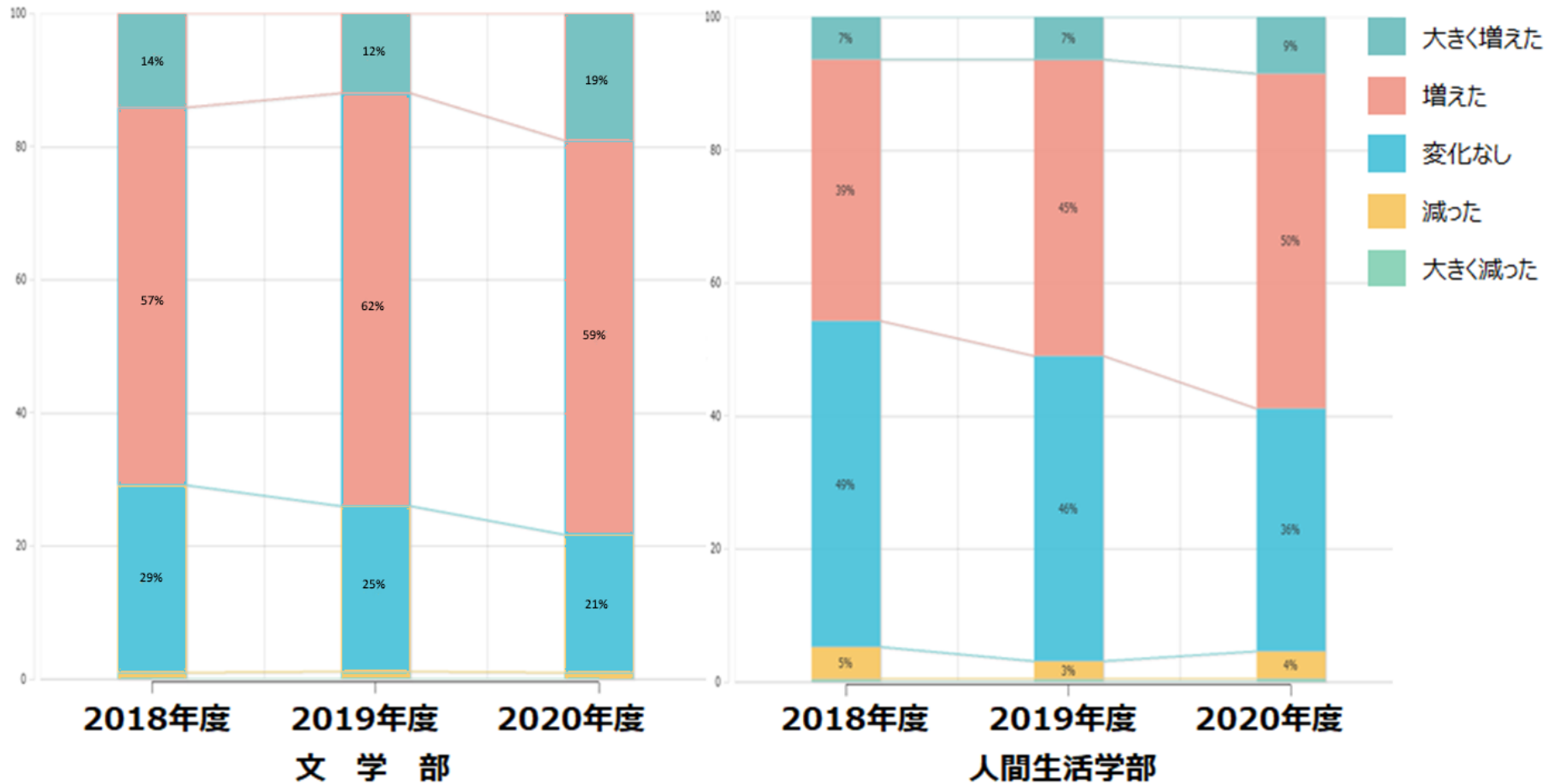


### 【コメント】

「大きく増えた」と「増えた」の合計は、文学部では横ばいであるが、人間生活学部では若干増加傾向が見られる。対面授業（2018、2019年）と非対面授業（2020年）の違いが影響しているかどうか検証を加える必要がある。

## 6-4. 批判的に考える能力

[Q7-D]

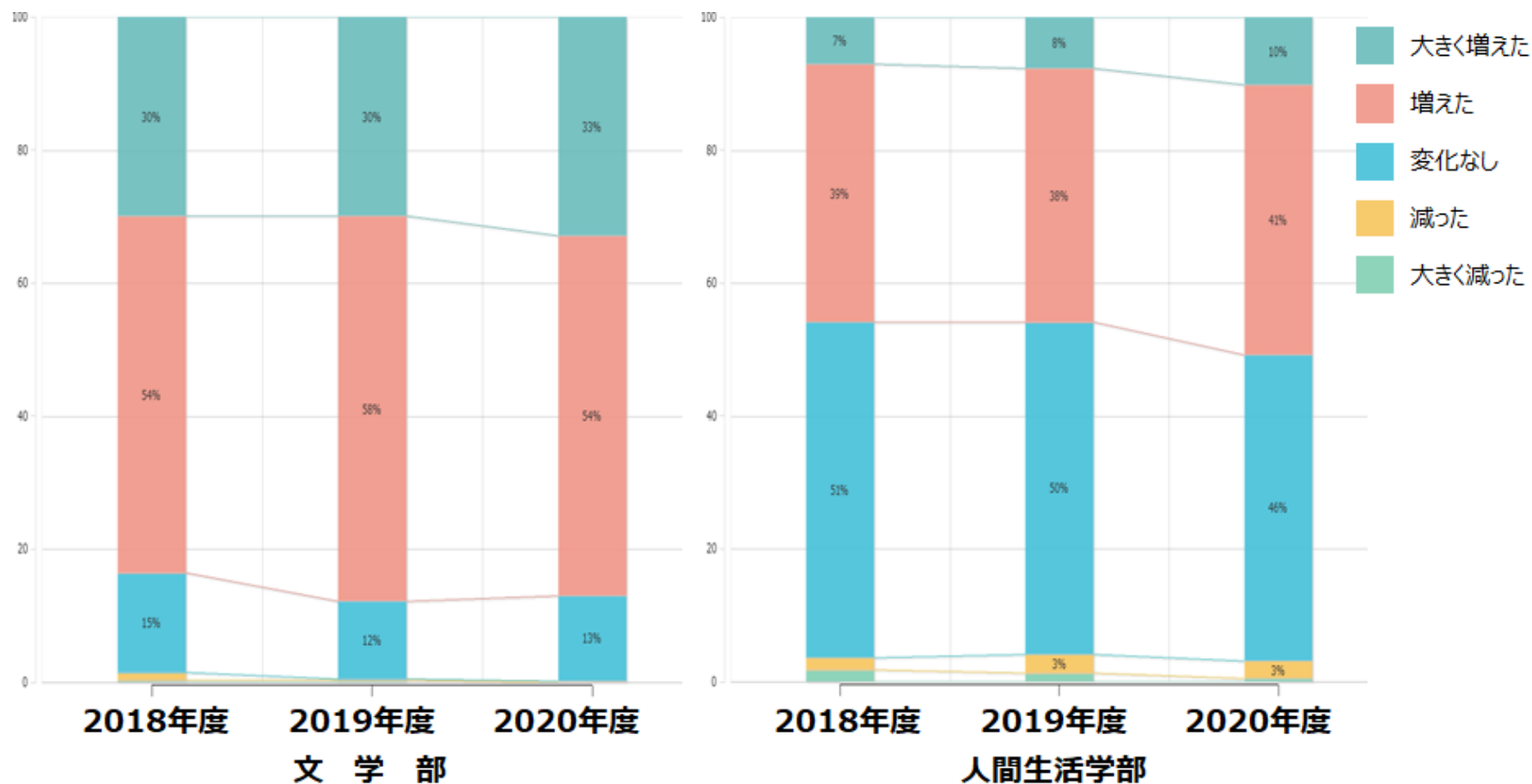


### 【コメント】

学部間の比較では文学部が人間生活学部を大きく上回り、経年比較でもその傾向は変わらなかった。両学部とも「大きく増えた」と「増えた」の合計が増加傾向にあるが、対面授業（2018、2019年）と非対面授業（2020年）の違いが影響しているかどうか検証を加える必要がある。

## 6-5. 異文化の人々に関する知識

[Q7-E]

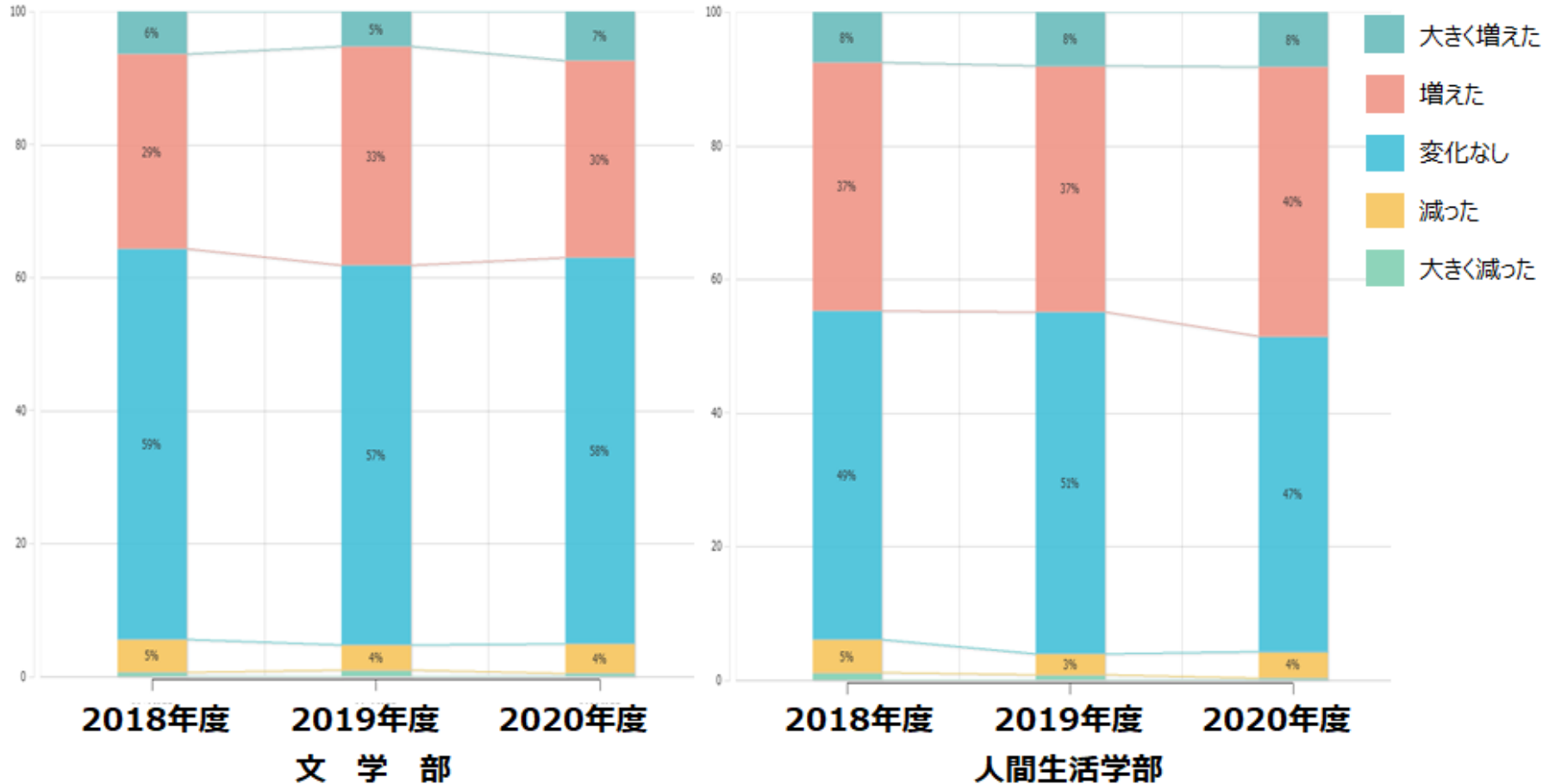


### 【コメント】

学部間での比較では文学部が人間生活学部を大きく上回り、経年比較でもその傾向は変わらなかった。両学部とも「大きく増えた」と「増えた」の合計が若干増加しているが、対面授業（2018、2019年）と非対面授業（2020年）の違いが影響しているかどうか検証を加える必要がある。

## 6-6. リーダーシップの能力

[Q7-F]

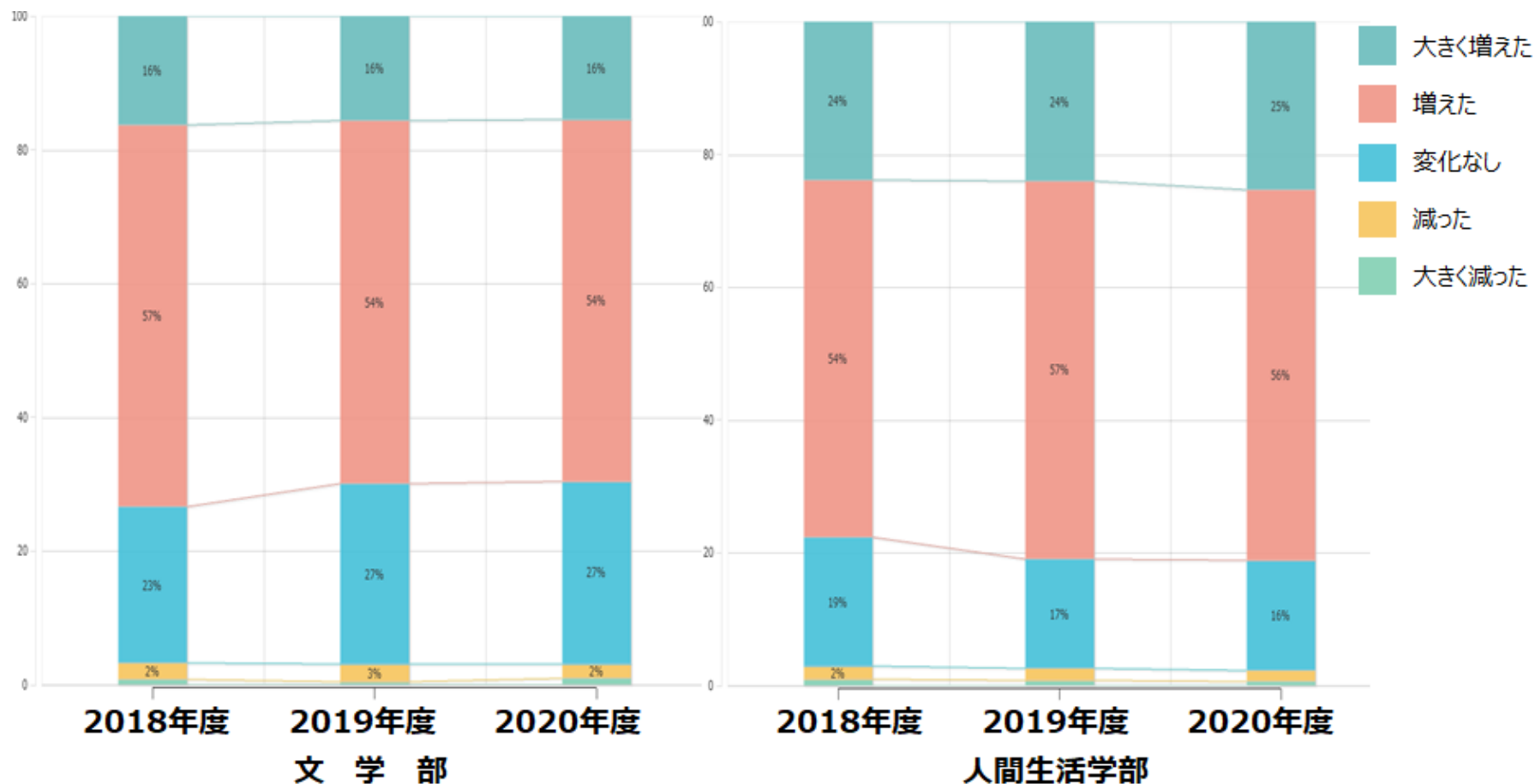


### 【コメント】

学部間の比較では人間生活学部が文学部を若干上回り、経年比較でもその傾向は変わらなかった。両学部とも「大きく増えた」と「増えた」の合計に大きな変動は見られなかった。

## 6-7. 他の人と協力して物事を遂行する能力

[Q7-H]

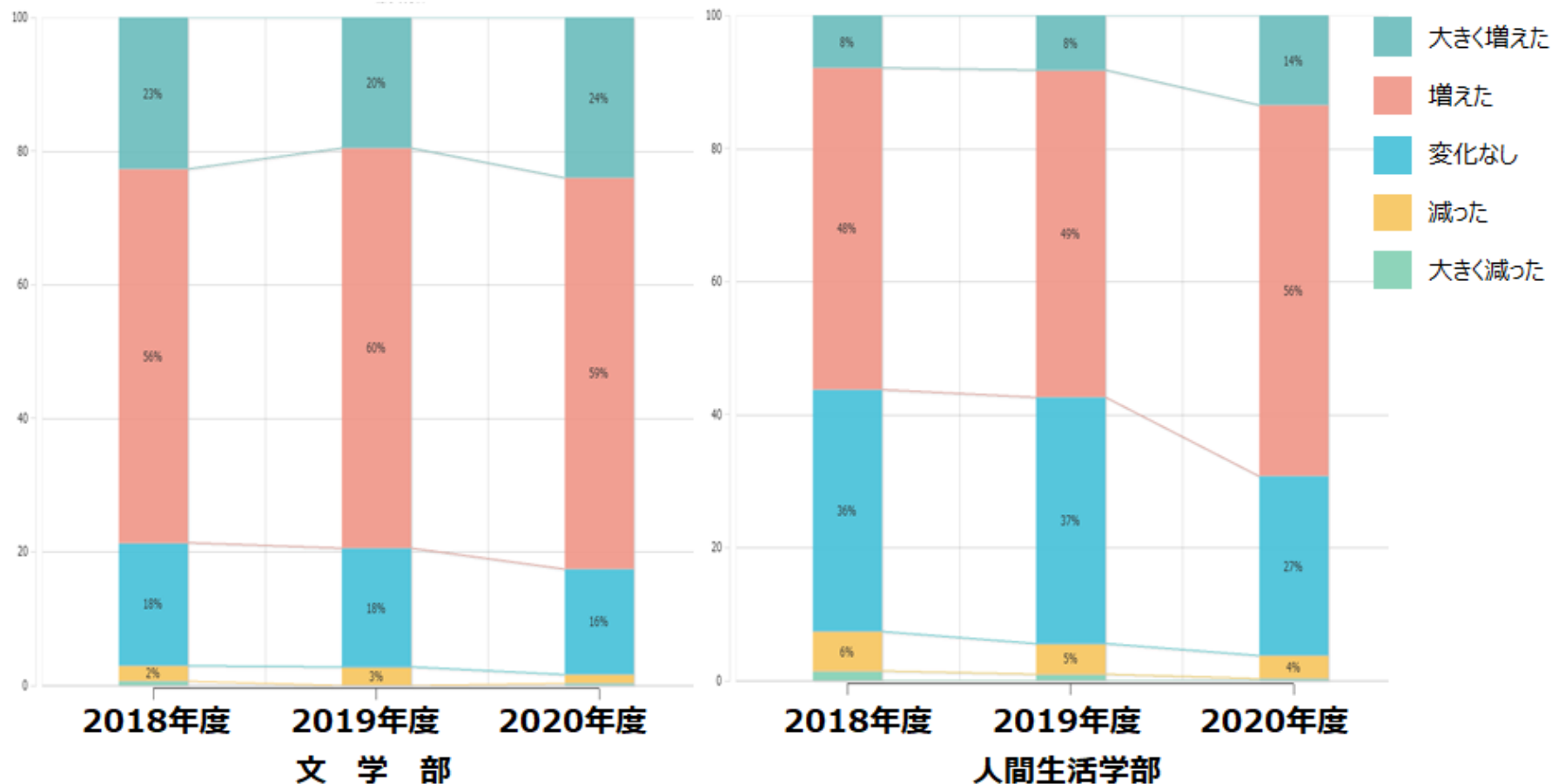


### 【コメント】

学部間の比較では人間生活学部が文学部を上回っており、経年比較でもその傾向は変わらなかった。人間生活学部は、文学部に比べると学生の協働による実習や学外活動が多いが、そうした学部の特性と強調性やチームワーク能力との相関について検証を加えていく必要がある。

## 6-8. 文章表現の能力

[Q7-L]

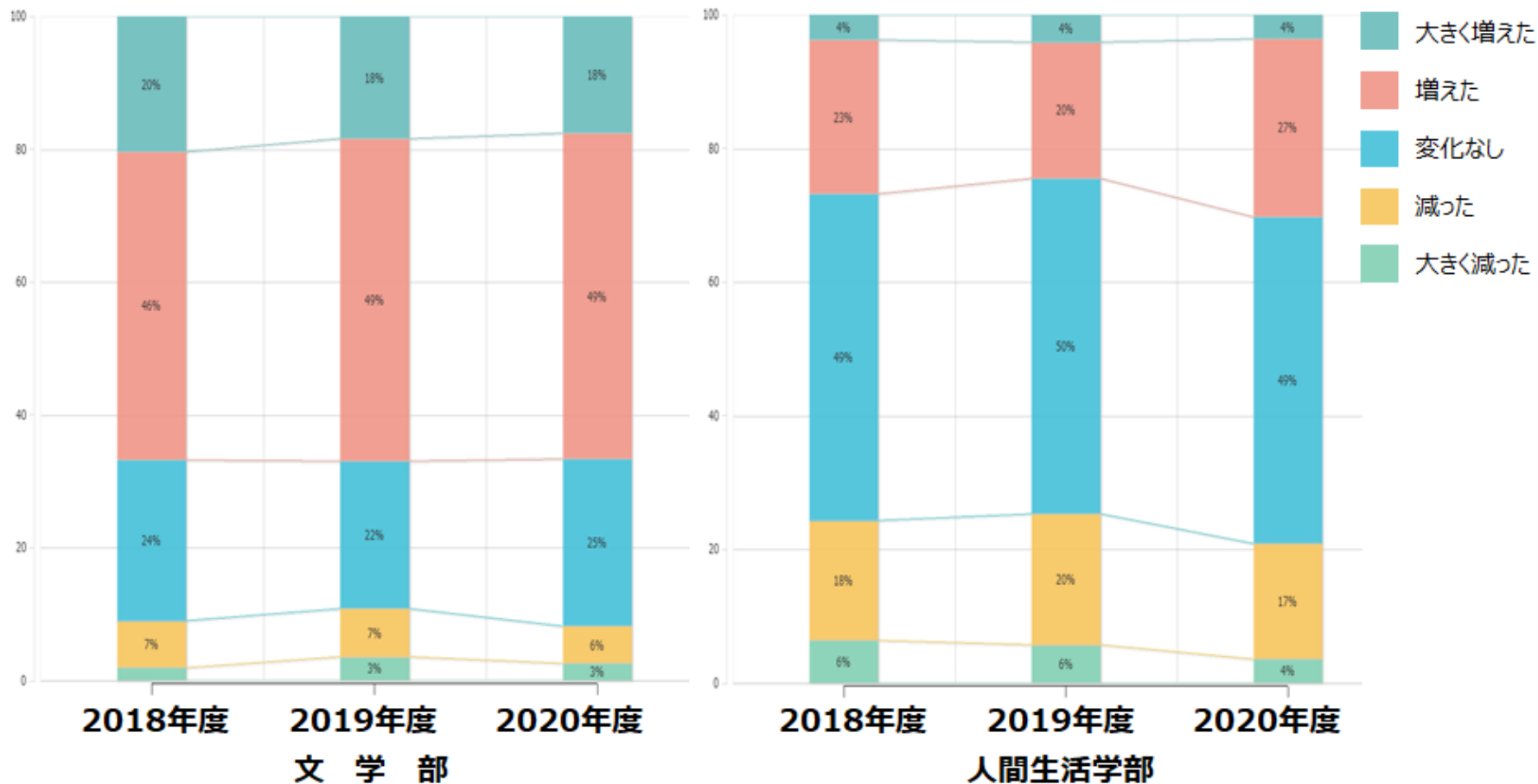


### 【コメント】

学部間での比較では文学部が人間生活学部を大きく上回り、経年比較でもその傾向は変わらなかった。両学部とも「大きく増えた」と「増えた」の合計に増加傾向が見られるが、対面授業（2018、2019年）と非対面授業（2020年）の違いが影響しているかどうか検証を加える必要がある。非対面授業により以前にも増してレポート作成等の課題に取り組んだことが影響しているかもしれない。

## 6-9. 外国語の運用能力

[Q7-M]



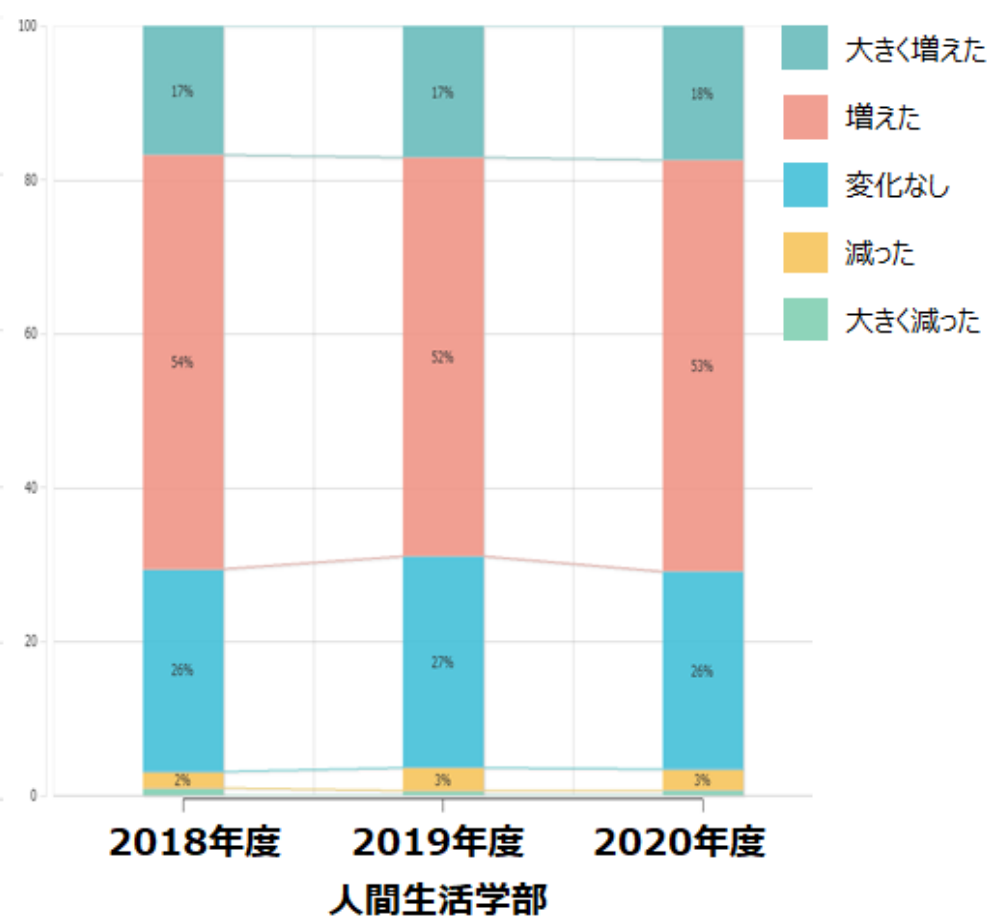
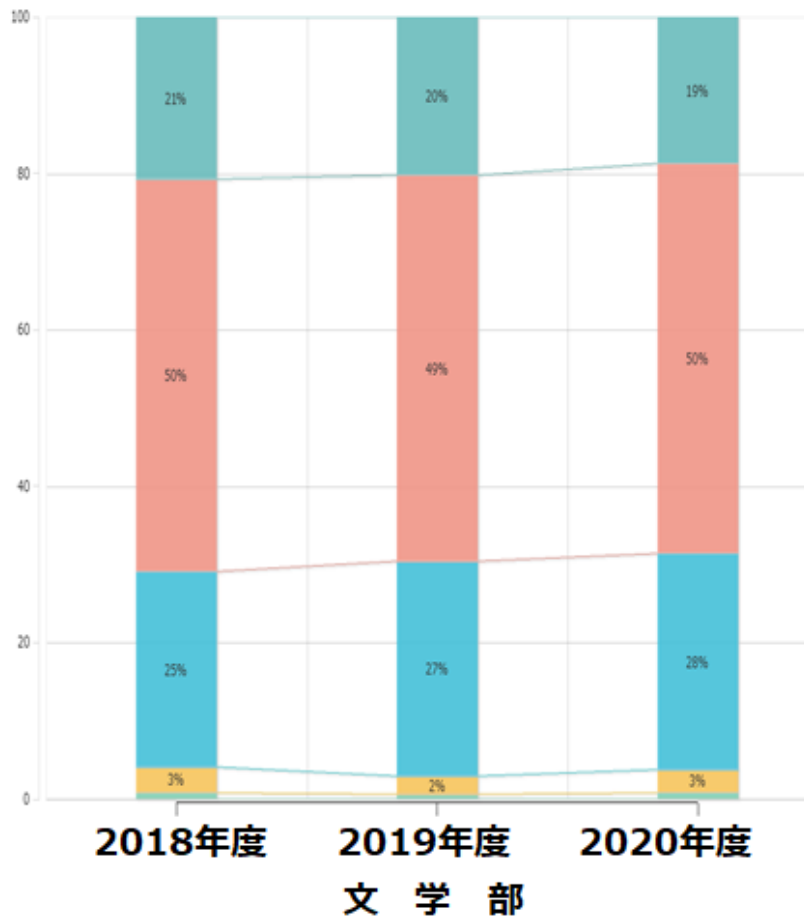
### 【コメント】

学部間の比較では文学部が人間生活学部を大きく上回り、経年比較でもその傾向は変わらなかった。文学部は、人間生活学部に比べて外国語科目の必修単位数が多く、ACEプログラムや上級外国語科目の履修者が多いことを反映した回答傾向といえよう。取得単位数や科目の履修状況（難易度や言語の種類等）と獲得した能力との相関について検証を加える必要がある。



# 6-10. コミュニケーションの能力

[Q7-N]

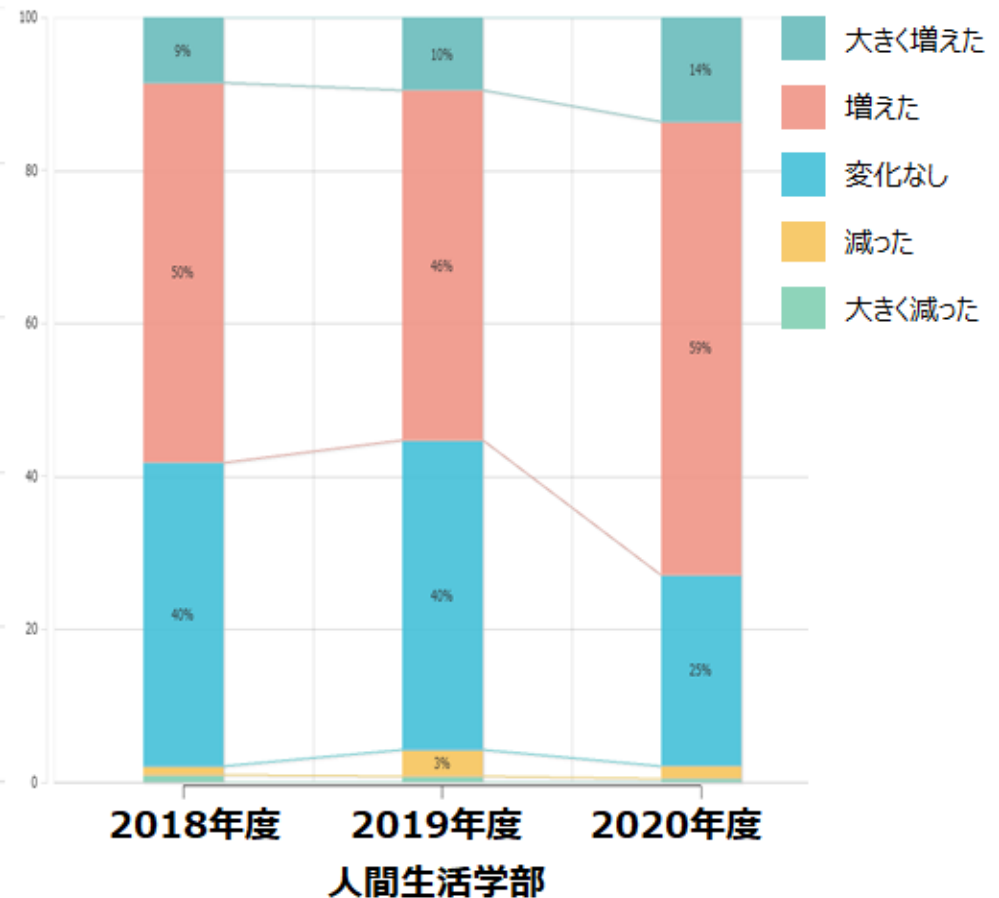
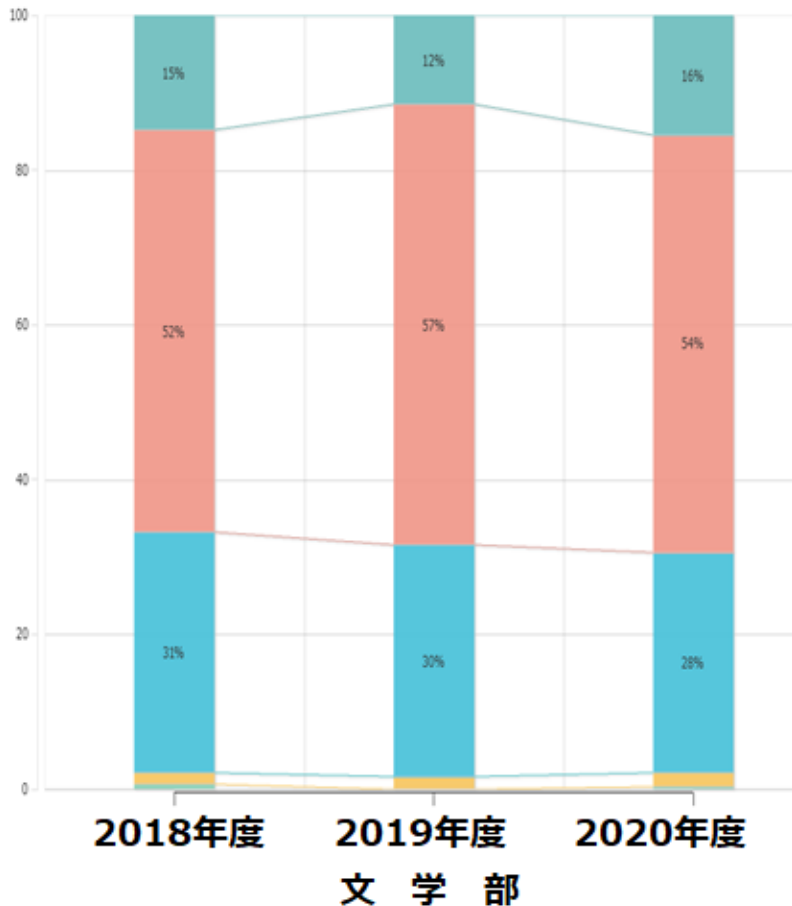


## 【コメント】

経年比較では、両学部とも「大きく増えた」と「増えた」の合計に大きな変動は見られなかった。

## 6-11. プレゼンテーションの能力

[Q7-0]

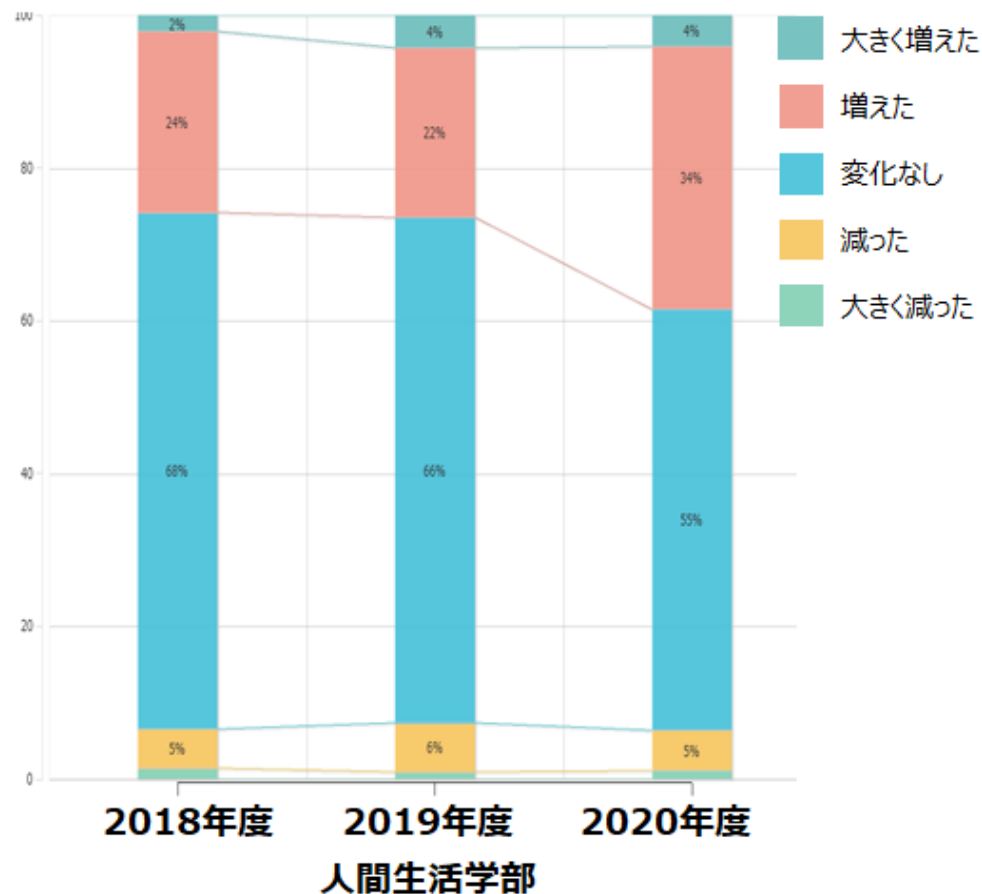
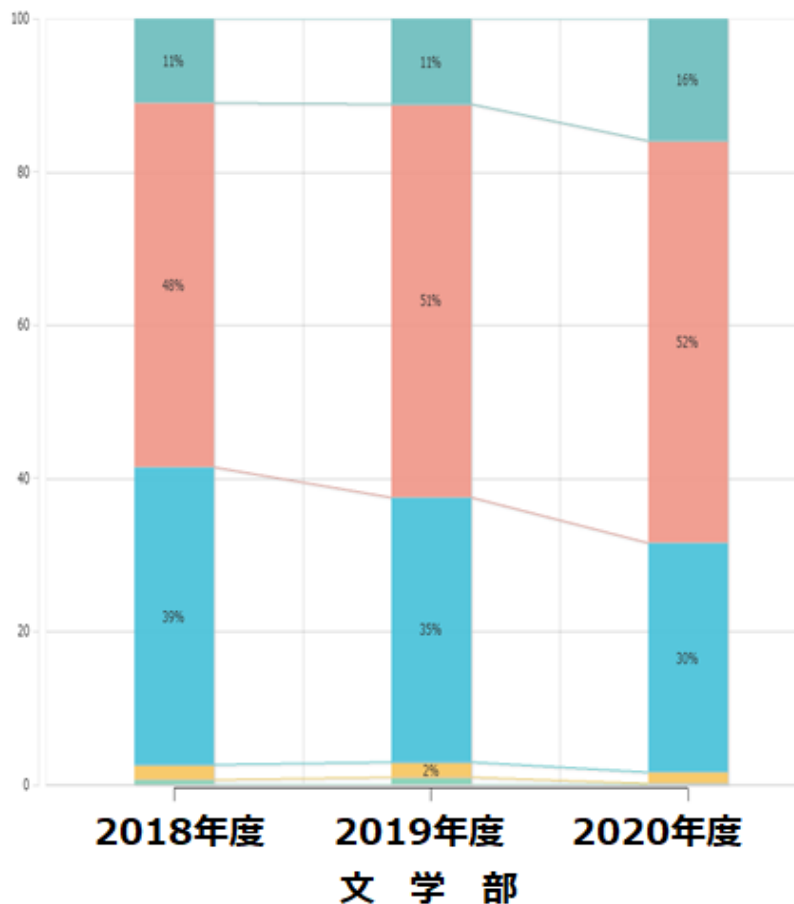


### 【コメント】

経年比較では、文学部に大きな変動は見られないが、人間生活学部においては「大きく増えた」と「増えた」の合計が大幅に上昇しており、対面授業（2018、2019年）と非対面授業（2020年）の違いが影響しているかどうか検証を加える必要がある。

## 6-12. グローバルな問題の理解

[Q7-S]



### 【コメント】

学部間の比較では文学部が人間生活学部を大きく上回り、経年比較でもその傾向は変わらなかった。文学部は、人間生活学部に比べて外国語科目の必修単位数も多く、世界の文化・歴史や国際理解等に関する科目が多く開設されていることを反映した回答傾向といえよう。経年比較では、両学部とも「大きく増えた」と「増えた」の合計が大幅に上昇しており、対面授業（2018、2019年）と非対面授業（2020年）の違いが影響しているかどうか検証を加える必要がある。

異文化、外国語、グローバル等などの一部の項目では対面授業（2018、2019年）と非対面授業（2020年）の違いが影響していることが推察される項目が複数見られたため、授業形態と学生が自己評価した「能力の変化」の相関について、今後検証を加えていく必要があるだろう。

近年、経済産業省が打ち出す「社会人基礎力」や中央教育審議会の答申が定義する「学士力」、あるいは文部科学省が主導する「就業力育成事業」に見られるように、学士課程を通じたジェネリックスキル育成への期待が高まっている。本調査の項目として設定されている「能力」（ジェネリックスキル）は「リテラシー（知識を活用して問題を解決する力）」と「コンピテンシー（人と自分にベストな状況をもたらそうとする力）」の2つの要素で構成されるが、調査結果を活用して本学学生のリテラシーとコンピテンシーの特性を理解し、教職員間で共有して改善に繋げていくことが重要である。

加盟大学では、本調査による学生の自己評価に加えて、客観的にジェネリックスキルを測定するアセスメントテストを導入する事例が増加してきている。「学修成果の可視化」の観点からも、DP及びCPとの関連性や客観的な評価指標と併せた教育成果の検証が求められており、本学においても検討の必要があるものと思われる。

また、今回の調査では項目から除外されたが、数理的能力に関しては、中央教育審議会が平成30年に出した「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」において、数理データサイエンスを基盤的リテラシーと捉え、文理を超えて共通に身に付けていくことが重要であると指摘されている。本学においても数理・データサイエンス教育やそれらの知識を活用して様々な学問分野を横断的に学修するSTEAM教育を将来的にどのように取り入れていくのか、引き続き検討を進めていくことが求められる。